

地域社会の活性化とスポーツ文化の振興 (クロカンスキー・ノルディックウォーキングの村づくり=旧大滝村を事例に)

進藤 賢一

はじめに

事柄の発端は極めて単純な出来事であった。ひとりの外国人と出会ったことが出発点だった。それが10年後には小さな村のビッグイベントにまで発展し、18年後の今日、北海道の大滝はクロスカントリースキーのメッカ、ノルディックウォーキングの発祥地とまで言われる状況に発展した。それも極めて短期間に人々の心を掴み、無理のない自然な形で、地域の置かれた環境を活かしたイベントになったのである。イベントだけではない。

常設コースとスキー環境の整備は、大滝村民や近隣市町村のスキーヤーに利雪、親雪の喜びを与え、フィットネスパークの原型をも生み出した。

クロスカントリースキーは単に大会の成功に留まらない。全日本級の選手が集い、世界ノルディック選手権(2007年2月22日~同3月4日)出場選手が練習場として絶賛したコースを生み出し、ノルディックウォーキングでは大滝村を中核として指導員養成などに力を注いだことによって道内各地や本州方面にまでこの健康運動が波及していったのである。

村には立派な全日本スキー連盟(SAJ)公認の常設スキーコースが出来上がり、ノルディックウォーキング専用コースも完成した。村民が日常的に自然と親しみながら体力を養い、健康を維持し、人間的な交流を培っている。

おおたき国際スキーマラソン大会の発祥は、フィンランドのスポーツジャーナリスト、スチッグ・ヘグブロム、札幌学院大酒井恵真教授と私

のトライアングルな関係のなかで生まれた。火付け役は確かに3人であった。しかし、スキーマラソン大会を行政のなかに位置づけ、推進し、実践していったのは紛れもなく大滝村館林俊圀村長や菅原弘光助役、藤田謙収入役、片川善明総務課長、藤田隆明役場職員ら地元関係者であり、北海道フィンランド協会の井口光雄専務理事や井幡篤憲理事等のスキー関係者がそれを後押ししたことで軌道に乗った意義ある催し物になった。

村の豊かな自然に着目し、過疎地域という悪条件を逆手にとってスポーツ文化を浸透させる。年間通して村人や周辺市町村の人々が集うクロスカントリースキーとノルディックウォーキングが定着し、フィットネス増進と地域文化の定着があった。発祥からの経過と文化的意義について記述しておくこととなるが、その前に大滝村とわたしの係わり合いを述べよう。

1985年夏だったと思う。伊達市文化会館で北海道教育委員会の主催する婦人教養セミナーが開催され、私は講師及びコメンテーターとしてこの会に出席していた。当時のセミナーは道内各地で開かれ佐藤朝子北海道新聞社生活部長、高橋重義前北海道教育委員会指導主事と私の3人が講師として招かれ講演会活動をしていた時期である。各自がそれぞれの地域に赴いたこともあれば、3人で一緒に会議の講師席に座ったこともあった。問題提起はいろいろあった。地域の活性化と婦人の役割、地域の古い陋習や慣習の克服の取り組み、健康維持や地域の医療施設、医師問題など地域に密着したテーマで報告し、参加者の意見を聞くもので、主催は北海道教育委員会社会教育課であった。

伊達市のセミナーで進行役を務めたのは旧大滝村の片川善明総務部長である。私は片川氏と昼食を取っていると、「大滝には北湯沢温泉がある、温泉団地も造っていますよ」という話が飛びだした。私が大滝村と関わりをもつきっかけになったのはこのひとことだった。

北海道開拓記念館の丹治輝一学芸員は温泉博士の異名をとる温泉好きで、調査地に赴く際は、地元や近隣の温泉地を巡り、温泉の質（成分な

ど)や湧出量、温泉集落を地理学的に研究するために温泉宿への宿泊を怠らない。北海道内の200以上の温泉地での宿泊を経験し、北湯沢温泉はトップクラス、江戸時代の儒学者林羅山が言ったと伝えられる日本三大名湯の有馬温泉(兵庫県)、下呂温泉(岐阜県)、草津温泉(群馬県)に匹敵するという評価である。

泉質は単純泉であるが、噴出温度は94度で湯量は豊富、肌触りは抜群によく、温泉水は飲用、洗濯、皿洗い、暖房に利用できる利点がある、道内でこれだけの温泉は見当たらないというのが彼の言い分だった。

私は1981年から毎年、定期試験の採点時期は北湯沢の湯治宿であった「横山温泉ホテル」に2~3泊投宿し、学生の期末試験の答案を読むことにしていたから、温泉宿の元谷村会議員(社長)や若旦那などとは懇意になっていた時期である。

片川善明大滝村総務課長はセミナーの数日後、電話で「札幌からバスで喜茂別までおいでください。喜茂別では館林俊圀助役(後の村長)が出迎えています」と伝えてきた。私は「車で直接村役場に伺います」といって後日大滝村役場を尋ねた。

当時、大滝村役場の糸川章夫村長は札幌出身のいわば「外部出身者」であったから、村政運営の要は館林俊圀助役が担っていたようである。

助役は早速、北湯沢の温泉住宅団地の売り出しを考えている、良かったらご購入ください、と切り出した。150坪ほどで500万円くらいだった。

条件は、「住宅団地であり別荘地ではありません。別荘地は300坪以上のものになります。土地を購入したら1カ年以内に家を建てるのが義務づけられています。温泉は村が権利を有していて、団地の各戸に分湯し、使用量に応じて代金を支払って戴きます。」

私は了解し、すぐに決断しようと思った。

もう1つ注文がついた。「大滝村村政についていろいろご助言戴きたい。いまは、退官した元北大理学部教授の水谷先生にもお願いしている。」

私は「自治体行政に関わったことがないので助言ができるかどうかわからない。館林助役と酒を飲み、自分の主張くらいはできるかも」。助役は「それで結構、結構」といった。これが館林助役と私の初めての出

合いである。以後、村政について話し合う機会が頻繁に訪れる。

私はこの年の夏、北湯沢温泉の湯の町団地に土地を購入し、家を建て、現住所も札幌市から大滝村に移した。温泉地に家を建てる目的はもう1つあった。年老いた母が山梨の実家(小淵沢)で1人暮らしをしている。せめて冬の間だけでも温泉で暮らさせたい。北湯沢にはリハビリセンターや北湯沢病院もあり医療施設が整っているのも魅力だった。

湯の町団地と名称のついた温泉団地は以前北大生協が保有しアスパラガスなどを栽培していた土地を村が買い戻した場所で、長流川の段丘上のやや緩傾斜地にあり、川向こうには旧国鉄胆振線の北湯沢駅(現在は湯元名水亭)があった。

北湯沢に現住所を移して、団地内に知人が次々できた。役場に勤める石野良一氏には、拙宅の鍵を預かって戴き、加藤リハビリセンター施設長や同病院の看護婦長とも酒飲み友達になった。大都市と異なり、田舎はひとの情が細やかで皆が他域からの入居者に親切にしてくれる。

私の母は冬期間に限ってこの温泉地に10年間通い、夏は山梨に戻る生活をしていたが、次第に北湯沢に滞在する期間が増えた。旧来の陋習に縛られて生きている山梨に比べ、北湯沢の人々はよそ者に親切で、人間的な温かいつきあいをしてくれたからだ。

母親が山梨で死去してからも、北湯沢の老人会は、忍ぶ会をしたり、母親の生前植えていった水仙を後生大事に栽培してくれたのである。

村の人々とのつきあいが増えるに連れて、小さな自治体に住む人々の上にのしかかる問題が次第に明らかになってきた。

過疎問題をとかく財政力低下に伴う利便性の欠如と解釈する傾向が強い。人の流失が続く集落に活気が乏しい。買い物が不便、スーパーマーケットや高校がない。公共交通機関の廃止や閉鎖おこる。就業の機会が乏しいから人が集まらない。若者が村の中に少ない。確かに大滝村もその通りである。

しかし、この村は行政が中心になって就業機会を増やそうと病院やリハビリセンター、身体障害者や脳に障害のある人々の施設をつくり、「福祉の村」といわれるほど就業機会を創った。でも、そうした施設・病院

に勤務する人は近隣の伊達市に住居を移したり、新築の家を建てて伊達市から大滝村に通うのである。暮らしに不便な村の生活より高校もスーパーマーケット、専門店もある地方都市（伊達市）に住む希望者が多いのはむしろ当然かもしれない。クルマ社会が就業機会のある村の人間を都市に引き離していったのである。加えて伊達市は定年後住み着く場所として、北海道内外の人気スポットでもあった。北海道の「湘南」といわれる土地柄で積雪量も少なく、気温も相対的に低くない。

人口が流出し、自然増もままならない過疎の村に何より不足しているのは文化活動の乏しさである。人間が生活していくには経済活動だけでは成り立たない。芸術、学術、スポーツなどの文化的匂いが漂い、満ちてくる必要がある。

スポーツ振興は立派な文化活動である。村人の心に活力がないことこそ、過疎化の最も深刻な部分ではないか、と考えるようになった。

1990年スポーツ文化が開花するチャンスが訪れた。それはクロスカン トリースキーを大滝村に根付かせること、退屈なはずの雪と寒さから開放される気分を味わうこと、宿命的で嫌われもの雪を、親雪・利雪するよう意識を変えることだった。

大滝村（現伊達市大滝区）は支笏洞爺国立公園のなかほどに位置している。村の境界線は札幌市にも隣接しているが、人口の流失に歯止めのかからない過疎指定地区であり、北海道24の村のなかでも、最も人口の少ない地域の1つである。2006（平成18）年3月、村は伊達市に合併し大滝区になった人口は僅か1400人に過ぎない。日鉄徳瞬警鉦山が稼動していたころの1918（大正7）年の4900人の3割弱に減った。

こうなると、どこの過疎地域も同じ問題を抱える。地域としての税収が伸び悩み、人口が流出する負のスパイラルに巻き込まれる。

行政担当側は「せめて村民の健康や安全を保ち、美しい自然環境を利用した文化の創造はありえないものか」と思案し始めたが、一筋縄ではいかない。

芸術文化もあればスポーツ文化もある。国内外のコミュニティとの国内・国際交流もある。

そうした模索のなかで誕生したのがスキーマラソン大会と常設コースの創設だった。

「おおたき国際スキーマラソン大会」は小さな村の国際交流が生んだ地域づくりの結晶であり、雪と寒さを積極的に取り込んで、冬を楽しむひとびとの夢や希望を実現したイベント行事である。冬のクロスカントリースキーの付録のようにして生まれた春から秋にかけてのノルディックウォーキングも立派なコースが出来上がり、ひとを集められる大会に成長し、2007（平成19）年大会の参加者は450人に達した。人口が1400人の旧大滝区としては驚異的な数値である。国際交流の結晶が発展し、新たな地域活性化を生む小さな村の実験の裏側にはどんなドラマがあったのか、検証してみたい。

伊達市大滝区（旧大滝村）の地理的特徴と変遷

大滝村は2006（平成18）年3月伊達市に飛び地の状態で編入合併し、自治体としての独立機能を終えて、伊達市大滝区と地域名を変えた。千歳空港から60km、西に車で約1時間の距離にあった面積272km²の村であった。札幌市からみれば南南西の方向で支笏湖と洞爺湖に挟まれるように位置し、支笏洞爺国立公園の一角を占めている。人口わずか1400人（2007年）の村落は札幌市に隣接してはいるが、札幌の中心から道路で凡そ100km、車で2時間弱の地点に存在していた。赤井川村、京極町、喜茂別町と並び大滝村は札幌市に隣接していながら、札幌市の通勤圏、通学圏、日常的買い物圏にならなかった。余市岳、無意根岳、札幌岳、空沼岳など標高1200mから1400m級の山々が札幌市との境界線付近に立ちただかって交通上の障害物になっているからである。

大滝村に隣接する札幌市側は、市域の60%を占める南区で、ほとんどが山林に覆われ、野生の熊も出没する山岳地域である。

50km逆に大滝村を中心軸に置いて直線で東側50km圏には札幌市をはじめ10の市域が連結し、人口は280万人と北海道人口の半分を擁する巨大な経済圏が取り巻いている。一般に言う「北海道J型メガロポリス」ないし「道央兜型メガロポリス」といってもいい人口集中地区がある。週

末にここから繰り出されるひとの波は支笏洞爺国立公園とそれを取り巻く海浜や山岳地帯、湖沼や温泉に向かう。道央圏西部(胆振・後志)の行楽地にはホテル、旅館、別荘が立ち並び、都市圏に住む人々に、健康と癒し、憩いの環境を創出している。

大滝村は豊かな自然が残り、人口も少なく、過疎地の状況が続いていた村であった。市街地らしい集落は長流川に沿って役場の所在する本郷、温泉の北湯沢、農協の置かれた優徳程度で、あとの家々は散村の様相を呈し散在している。

1918(大正7)年、大滝村の前身、徳瞬瞥村の人口は4871人を記録して開村以来最多の人口になったが、1960年代の高度経済成長期以降離農がさみだれ的に進んだ結果、急速に人口減少が進み農村崩壊がはじまる。追い討ちをかけるように1971(昭和46)年、村の主力産業であった日鉄徳瞬瞥鉱山(鉄山)が閉山し、村の人口は一挙に500人以上減少して、過疎振興法の指定を受け、事実上過疎地になったのである。

1950(昭和25)年9月、村名は徳瞬瞥村から大滝村に変わる。名前は村の名勝地「三階滝」から決めた。村は、産業面では「農業、福祉、観光」に就業人口の確保を求め、生活文化面では「教育、スポーツ振興、国際交流」を通じて「ひとづくり」を目指した。このままでは村は崩壊するかもしれない危機感を感じながらである。

農業では黒毛和種の大滝牛育成や高原野菜のアスパラガス、長いもの栽培に力点をおいた。温泉熱を利用したキノコ栽培や、バイオ技術を組み合わせたカスミソウ、洋ランなど花卉栽培にも取り組み、近年はアロニヤの栽培と加工をも手がけている。

福祉面では、1971年本格的温泉ボーリングに成功し、同年これを利用した身体障害者療養・厚生施設「大滝リハビリセンター」を皮切りに、1972(昭和47)年に精神薄弱者施設「大滝学園」と「優徳荘」が設立された。1973年と74年には、養護老人ホーム「大滝温泉ハイツ」、重度身体障害者施設「大滝わらしべ学園」を相次いで誘致した。

このほか村内優徳地区には1975年、200床を越える「北湯沢病院」が開院する。「大滝リハビリセンター」、「北湯沢病院」の合わせた総ベッ

ド数は800を超え、村総人口の50%に達していた。

北湯沢温泉地区では既設の温泉旅館やユースホテルに加えて1995年、収容能力各1300人の野口観光「第一名水亭」、さらに97年には同規模の収容能力をもつ「第二名水亭」を誘致、旧緑館を改修した「ホロホロ山荘」を合わせた宿泊可能人数はほぼ3000人になり、観光客は道内外に留まらず、近年は台湾、韓国、中国本土など海外からも入りこみ客が増えつつある。

自然破壊に関わる問題がリゾート法（総合保養地域整備法）の発効した80年代後半起こった。オロフレ山付近か美笛峠付近に日本航空、ヤマハ、千歳市、大滝村の第三セクターによる巨大スキー場建設の話が持ち上がった。この計画にはゴルフ場やホテルも加えた、いわばリゾート地3点セット方式であった。誘致に傾く館林村長と話し合うこと数度に及んだ。私はその都度こうした巨大開発に反対の意向を伝えたつもりである。この問題はバブル崩壊やヤマハが赤井川村にスキー場施設を変更するなど外的条件も手伝って崩壊した。館林村長はそのあと、「ホッとしたよ」と心情を話してくれた。

優徳や北湯沢の部落には村民のための無料の温泉公衆浴場がある。これを有料にすることが議会で決定された。理由は、近隣の居住者は利用できるが、遠距離の居住者は日常的に利用できないから不平等である、とのことである。私は温泉観光を売り物にしている村が、まず村民に利益を還元していくことが重要だとの考え方を村長に申しあげていた。

それから1年も経たないときに、村長が拙宅を訪ねた折、「公衆温泉有料問題は撤回したよ」と返答した。

美笛トンネルが完成し、支笏湖南岸道路が舗装されてから大滝村を貫通する国道465号線（道道からの昇格は1990年？）は交通量が急速に増加し、村内での交通事故が多発しはじめた。いままで、1000日交通事故死者なし達成が、文字通り実践されてきたが、交通量が増え、この目標は絵空事になったのである。

舗装道路の完備で、札幌圏の日帰り観光、一泊観光は支笏洞爺国立公園に集中する。大滝村の国道は通過しなければならない重要路線になっ

たのである。

交通事故対策は勿論重要であるが、通過観光客の増加を逆手にとって即売場を増やし、温泉宿泊可能ベッド数増加により、村に利益をもたらすことの重要性を、私は館林村長と話し合った。

即売場は増えてきた。ホテルやベッド数も急増した。これは館林村長の力量によるところが大きい。

私にとって、館林俊圀村長は楽しい飲み相手であり、館林村長はひとの意見に良く耳を貸す尊い存在だったのである。

大滝村が村政の中に位置づけ積極的に対応した政策に「ひとつづくり」と「国際交流」があった。

外国人との交流はカナダの西海岸バンクーバー島のなかほどにあるレークカウチン村との姉妹村締結（1991年）に始まる。

それは人口規模に合った、身の丈相応のものであった。若い人から年寄りまで村費で援助しカナダに村人を派遣した。レークカウチン村からは毎年交流団が大滝村に来村してホームステイし、またレークカウチン村の英語指導助手が大滝村に滞在するようになった。

外国に羽ばたき、海外の事情を経験的に知ることは、集落から他国へは滅多に出ることのない村民をして外国文化への直接的接近を意味した。

大滝村では、その前哨戦として村役場職員の乗松良治らが小学生など子供たちに英語を教える運動を始めていた。

1987年、カナダ西海岸バンクーバー市の「さけを救う会」会長ジム・マクドナルド氏が北湯沢温泉に宿泊した際、村役場関係者との親善交流会が開かれたのである。

会長は翌朝、村内を散歩した折、子供たちが英語で挨拶したのに驚嘆したと語り、会長から「レークカウチン村」を姉妹村としてどうか、と紹介される。翌年村は、教育長を団長とする6人の親善訪問団をレークカウチン村に送り大歓迎を受けたのであった。

翌89年に佐藤祐幸教育長ら大人2人、子供4人がレークカウチン村を

訪問する。そこで相互訪問実現に向け話し合いを進めた。ホームステイの形で相互に20人前後の小中学生からお年寄りまでの訪問団を交流させるほか、レークカウチン村から英語教師の毎年派遣するよう取り付ける。

次いで、大滝村はカナダに長期及び短期留学する生徒を募集し、村ぐるみの英会話教室を呼びかけ、英会話学習教材は全戸配布された。

1993年には「国際交流ゲストハウス」が完成し、外国人英語教師一家滞在のための住宅も付置された。住宅のホールは英会話教室、ダンス教室、生け花、茶道など国際、国内の交流会で年間8000人が利用する文化交流の場へと変化した。

役場内の部課表示には英語看板が掲げられたのである。

大滝村の自然環境を見ると、冬の積雪量こそ札幌市とさして変わらないが、気温はやや低い数値が気象台の観測結果である。

大滝村は内浦湾から40km内陸の山間部にあることから気候は内陸性で寒暖の差が比較的大きい。年平均気温は4.8度Cであるが、冬はマイナス8度C、夏は20度C前後と、緯度では札幌より南に位置するが、平均気温は札幌より低い。サクラの季節は札幌より1週間から10日遅く、紅葉は同じように1週間から10日早いといわれている。積雪量は平地で50～70cm、高台地で120cm、根雪は12月中旬とされている。

スポーツ文化の面でも面目躍如たるものがあった。

大滝村でマイナースポーツとして根付いていた「歩くスキー」は、1990年代、フィンランド人など勧めもあって「おおたき国際スキーマラソン大会」として開花した。

外国人との国際交流を組み入れた新しいスポーツ文化の誕生である。

過疎地域に住む子供からお年寄りまで楽しめる歩くスキー、北欧では数百年前から行われていた重要な冬のイベントであり、誰もが楽しむウインタースポーツであった。

1990（平成2）年、フィンランドのスポーツジャーナリスト、スチッグ・ヘグブロム夫妻らの提唱によって、クロスカントリースキー大会が始められることになる。大会開催は国際親善の向上とスポーツ文化の交

流が過疎地を刺激し、住民の心を豊かに変える大きな行事になるであろうことを予測して出発させることにしたのである。

クロスカントリースキーは大会というたった1日の競技会として終わりを告げるものではない。シーズン始めから、シーズン終了までの冬季間、うっとうしく寒い冬と多雪を、楽しく有難い天からの贈り物として認識し、億劫で退屈に考えがちな雪の季節を人間の側に取り込むことに成功したのである。住民の心のギアを切り替えることでマイナスイメージの冬をプラスイメージに変え、アクティブにアウトドアで体や心を癒す思考の転換をおこなったともいえる。

「おおたき国際スキーマラソン大会」の開催は単に、イベントの成功に留まらない。降雪が一定程度に達すると直ちにオープンする（通常は12月の第3日曜日）クロスカントリーコース、全道、全国のトップスキーヤーが待ち焦がれる立派なコースづくりのノウハウ維持、ナイタースキーやワックスルームの整備、暖房の効いた休憩施設キートスマヤの設置は、多くの日本代表選手や外国選手の評判を呼び、競技選手の合宿者数も増加傾向にある。

2007年度2月22日から11日間、札幌市内で行われた「世界ノルディック選手権」では9カ国に及ぶ選手合計延べ1200人が練習場として、おおたき国際スキーマラソン大会コースの一部である「常設コース」に挑んだ。

札幌から道なりに100kmの距離の近さ、コースの斜度や幅、距離、圧雪状況など申し分ないというワールドカップ札幌大会の選手たちの声が聞こえた。

春季から秋季にかけては専用のポール（ストック）を利用し、冬場のスキーコースにウッドチップを敷き詰めた遊歩道を使つてのノルディック（クロスカントリー）ウォーキングという日本では珍しい山谷の杖歩行が日本に伝達され大滝村に定着する。フィンランドで始まったこの「杖歩行」は、フィンランドのオリンピック選手（リレハンメル複合競技）であったトピ・サルパランタによって1年後に大滝村での大会開催に繋がっている。まさに国際交流の真髄である。

フィンランドでは街中どこでも、山林原野でもポールを持って歩く人々を見かける。フィンランドの著名なポールメーカー・エクセル社の話では、冬のスキー用ポールを生産してきたが、最近は夏のノルディックウォーキング用ポールの量産が勝っている、ともいわれるほど国民的なスポーツになっている。

単に、ノルディックウォーキングは筋力をつけ、柔軟性を育み、下肢と上肢のバランスをとるだけでなく、メタボリックシンドローム予備軍の人々には有効な有酸素運動である。単なるウォーキングに比べ、消費カロリーが高いことで糖尿病、脂質代謝異常の予防と治療にも有効であるから、特に中高年齢層に深く浸透している。

ただ散歩がてら歩くよりもポールを使って歩くほうが「歩きたい」欲望を高め、特にノルディックウォーキングコースがない場所、例えば登山路、ハイキングコース、砂浜、雪原、川歩きなどさまざまところで利用でき、体の訓練になる。

大滝では冬のクロスカントリースキー常設コースにウッドチップを敷き詰め、スキーのオフシーズンはノルディックウォーキングに利用している。

冬場のクロスカントリースキー、夏場のノルディック（クロスカントリー）ウォーキングが集落の人々の健康維持、国内外の人々との交流に強い影響力を及ぼしている姿を時系列に、大会開催の動機、関わった人々や組織、運営上の問題、いくつか成果を含めて記述する。

第1節 スチッグ・ヘグブロムを誘ったことでビッグイベント始まる

1. クロスカントリースキー大会はじまる（黎明期）

大滝村にアルペンスキー場が開設されたのは1960年代である。村営北湯沢ホロホロスキー場と命名され、国民宿舎ホロホロ荘に付属する38度の急斜面と、この斜面を巻き込むようにファミリーゲレンデがそれぞれ造成された。小中学生にはスキー場利用に際し、格安のシーズン券が提供されていた。アルペンスキー場設計は室蘭市の清野市治によるものだが地形的制約からコースが狭く、短く、急斜面は最高38度もあり雪が

きにくい難点があった。このゲレンデの急斜面で練習した子供達のなかには、後に北湯沢中学から輩出し、全日本スキー選手権女子滑降、大回転で優勝する加藤有希（小樽双葉高校から筑波大）や札幌大学スキー部を一部に昇格させる牽引力となった加藤博史（札幌第一高校出身）らが生まれている。

斜度38度は転がり落ちるような急斜面だが、子供たちはヘルメットをつけ果敢に、直滑降に挑戦したのである。

ルスツやニセコ東山、ワイス、ニセコ岩内、キロロなど近隣に巨大スキーリゾートが次々オープンすると北湯沢スキー場のスキー客の入りこみ数は急速に減ってスキー客といえば国民宿舎の投宿客や子供達の遊び場程度の役割に過ぎなくなった。

スキー場や隣接する宿泊施設が村の所有・経営であったため、スキー祭りなどイベントで対応したがスキー客などの回復は難しかった。

大滝村は作詞家のたかたかしをスキー祭りのゲストに呼びカラオケ大会を催した。その夜、たかたかしは館林村長らと拙宅の山荘を訪れ、飲み明かし大滝村優徳に別荘を建てる決意をしたのである。

たかたかしの温泉別荘新築により歌謡界の歌手や作詞家、作曲家が大滝村を訪れるようになる。坂本冬美、松原のぶゑ、長井みゆき、都はるみの歌手や岡千秋、弦哲也、聖川湧ら作詞・作曲家が来村し、さまざまな行事に参加した。温泉を楽しんだり、村人と酒宴の場を共有することで大衆芸能を身近なものにしたのである。

たかたかしは雑誌「月間からおけ5月号」に豊かで楽しい大滝村の様子を書きつづっている。たかたかしは館林俊圀村長と岡よう子のデュエット曲「北湯沢の夜」を作詞、弦哲也が曲をつけてレコードとテープで全国に売り出した。北湯沢の Snackbar 兼カラオケ店で館林村長は坂本冬美がこの歌を謡った写真が残されている。レコードはビクターから発売されたから館林は全国3300市町村唯一の歌手といわれ、評判になった。

たかたかしが大滝村に家を建てたことで村側は大衆芸能である演歌をも文化の一角に組み入れて住民に訴えようとしたのであった。

歩くスキーについても大滝村民のあいだに全く根付いていないわけで

はなかった。

片川善明元大滝村収入役は「北湯沢に村営リフトつきアルペンスキー場があったが、アルペンスキーをおこなわない村民は夜間照明のついた北湯沢小学校のグラウンドで歩くスキーをおこなっていたり、丘の上の円山地区住民は、ほぼ全世帯の人々が健康づくりの目的で歩くスキーを楽しんでいた。また、歩くスキー教室も1978年（昭和53）から行われていた経緯があった」と説明する。

村民の間で、歩くスキーは静かではあったが確かに浸透していたのである。

歩くスキーに対する大滝村民の関心を、スキー大会に結び付けようと行政が中心に取り組みを開始した。

1985（昭和60）年、旧大滝村で北海道教育委員会主催の冬季スポーツ指導者（歩くスキー）講習会が開かれた。村民のなかに歩くスキーを楽しむ人々もいたが、整備された常設コースはなく、ワックス技術やスキー板の選択、スキーウエアなどの装備、走法など未成熟な状況であった。

「歩くスキー講習会をおこなった背景にはアルペンスキーに変わる歩くスキー定着の土壌がいくらかなりともあったのではないか」と藤田隆明伊達市職員（旧大滝村教育委員会）は振り返る。

スキーマラソン大会の誕生は、外国人をはじめ多くの関係者の働きで始まった。

1990（平成2）年2月9日、札幌国際スキーマラソン大会に参加したボストン在住のノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻（国籍フィンランド）が大滝村役場を表敬訪問したことがきっかけだった。夫妻は1972（昭和47）年開催の札幌オリンピック大会では報道関係者として札幌中心に取材し、本国にスポーツ情報を発信していた人々だ。

大滝村に案内したのは私であった。私は1987（昭和62）年から大滝村北湯沢温泉町に現住所を移して住んでいた。館林村長ら村の三役、役場職員との交流が深まり、村の振興計画などに提言を行ってきていたことから、夫妻を村長室に案内したのである。

スチッグ・ヘグブロムの妻ノリコと私の出会いは1986年である。私は留学先アメリカから北欧三国を訪ねた折、ヘルシンキにあるヘグブロム夫妻の所有するヘルシンキの邸宅やポルボの別荘に宿泊した。このときは北海道教育大の山下克彦教授と一緒にだった。こうした関係もあって後に山下教授等と、「大滝村の国際化」に関するNIRAレポートを請け負うことになる。

また、ヘルシンキから北に車で1時間郊外にあるスチッグ・ヘグブロムの妹、エルギッタ・ヨキビルタ宅に招かれパーティーを催したり、ポルボの語学民族学校校長でスチッグの長男セバスチアン校長宅でも宿泊し、フィンランド国籍でボストン在住のヘグブロム一家とは特別懇意な関係になっていたのである。

ノリコ・ヘグブロム（日本名大島則子）の妹、酒井玲子（北星学園大学教授）は酒井恵真（札幌学院大学教授）の妻であり、私は酒井恵真（元札幌大教員）として職場で同僚であったことから、ノリコ・スチッグの情報は早くから得ていた。

元をただせばスチッグ夫妻と私の関係を仲介したのは酒井恵真夫妻であったということである。

大滝村の村長室で対応したのは館林俊圀村長、菅原弘光助役、藤田謙収入役、佐藤祐幸教育長、片川善明総務課長等であり、通訳は同行したノリコ・ヘグブロムが勤めた。

話題は、“大手フィンランド住宅メーカー「ホンカラケネン」のモデルハウスを大滝村に建てたいが、村内に適当な用地がないものか。ログハウス風の住宅は大都市に建てるよりも閑静な山村に向いている”との内容であった。ノリコは「ホンカ」はフィンランドでは巨大産業だと説明した。

現ホンカジャパン社長(ホンカジャパン本社は現在山梨県富士吉田市)のマルコ・サルライネンは当時札幌の北星学園高校に留学中だった時期であり、ホンカが本州や北海道に進出する計画があったので、彼が大滝村を訪れたとき私の温泉別荘仙流荘にも来ている。

村側は前もって申し入れがあった事柄ではないので直ぐには応えられないと回答した。その夜は北湯沢にある私の山荘で行われたパーティで村側スタッフとヘグブロム夫妻らと交流会が行われ、再び歩くスキーが話題になった。

「フィンランドよりも雪の多い大滝村で、クロスカントリースキーをやらないのは何故ですか、歩くスキーのことです。フィンランドでは国民的スポーツになっていいいます」とスチッグ・ヘグブロムが切り出した。

村役場側は「歩くスキーはなかなか面白い」と興味を示しはじめる。ヘグブロム夫妻は、フィンランドがクロスカントリースキーの本場であり、冬季間の最もポピュラーなスポーツであることを情熱を込めて執拗に説明したのである。

館林村長はこれまで大滝村冬のイベントは北湯沢スキー場の「北湯沢スキー祭」だった。北湯沢スキー場は雪不足でゲレンデの状態が悪い日があり、スキー祭りの実施にも困難が伴っていた。前夜祭に作詞家のたかたかしなどゲストを呼んでカラオケ大会などやっていたが、歩くスキーも面白い。大滝村でもやっている人々がいる」と応えた。

スチッグが提案した。「フィンランドでは冬クロスカントリースキーが盛んで、多くの人々が冬季間スキーを楽しんでいる。フィンランドは高い山や適当な丘が少なく、アルペンスキーはそれほど一般的ではない。大滝村は雪は多く、冬が長いのでクロスカントリースキー大会など催したらどうか、そうすればスキーを通してフィンランドと大滝村の交流もできる」。しかし、館林村長は「私たちはカナダ、バンクーバー島のレークカウチンと姉妹村を提携しており、小さな村が2つの外国の自治体と提携するのは大変なことです」と当初はそれほど積極的でなかった。

クロスカントリースキーにあまり関心を示さないと見たスチッグは「フィンランドはサンタクロースの発祥地、またムーミン村があり作者のトーベヤンソンも知っている。一度皆さんでおいで下さい」と切り出す。

ノリコ・ヘグブロムは「私はボストンで旅行代理店をしているから安い切符を探してフィンランド人を大滝村に連れてくることも出来るし、

大滝村の人々がフィンランドに来るのもいい」と誘いをかけた。館林村長は「それはなかなか面白い」と興味を示し、重い腰を上げたのである。

同じ年、平成2（1990）年10月9日、ノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻は再び大滝村を訪れ、館林村長らに会った。

そのとき館林村長は 隣村の壮瞥町のオロフレスキー場を経営することになった滝川の友達から「壮瞥町はサンタクロース村を作るためフィンランドと交流する。この話は、すでに町議会で議論されている」との情報を得ていた。スチッグは「ムーミン村に興味があるのであればフィンランドに来てほしい。トーベヤンソンにも会わせよう」。

このときは「日刊スポーツ」誌の花輪記者も札幌から同行しており、役場の三役も臨席していた。

ノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻は1972年の札幌オリンピック冬季大会で結ばれた関係もあり、毎年行われているノルディックスキーの世界的な組織「ワールドロペット」札幌大会にもフィンランドの選手とともに数回参加している。

ノリコ・ヘグブロム氏は「札幌のワールドロペットは、大会が終わると解散してしまい、大滝村のような温泉リゾート地でクロスカントリースキーを楽しみながら大会後リラックスしたいものだ。また、札幌大会に参加したフィンランド人たちを大滝村に連れて来ることが可能だ」と館林村長に話していたのである。

ヘグブロム夫妻は「大滝村でクロスカントリースキー大会を開催することになれば、私たちはフィンランド人だけでなく、アメリカ人、スイス人、スウェーデン人など外国の仲間を大滝村に呼び寄せ、スキー大会を盛り上げることができる」といった。

2. 国際交流のなかで生まれた大会(第1回～第3回おおたき国際スキーマラソン大会)

大滝村で「歩くスキー大会」実施に踏み切ったのは、1990（平成2）年の夏、役場における1991年度予算編成打ち合わせ会議であった。館林俊圀村長、菅原弘光助役、片川善明総務課長ら役場の首脳部は、「地域

振興]、「冬村民の体力づくり」を目標に歩くスキー大会実施を決意し、村の教育委員会、スキー連盟、体育協会の理解を得て村議会の了解を取り付けた。ノリコとスチッグ・ヘグブロム夫妻の熱血ぶりは徐々に村長や村三役のこころを取り込んでいったのである。

館林大滝村長らは1990（平成2）年夏、村としての大会決定に伴い11月にノリコ・ヘグブロム氏の紹介で、札幌スキー連盟の井幡篤憲や池田幹夫・純子夫妻らクロスカントリーの専門家を大滝村に招聘し、スキーコース選定に取り掛かった。

井幡、池田は札幌スキー連盟の役員でクロスカントリースキーの専門家である。

また、両氏は井口光雄北海道フィンランド協会専務理事らとともに、これまでフィンランドとの交流に深く関わってきている人々であった。

こうして第1回「おおたき国際スキーマラソン大会」は1991（平成3）年2月9日と決定、コースは元国鉄胆振線跡（遊歩道平成ふるさとの道）の3kmと8kmに決定した。距離を短く取ったのは姉妹村カナダ・レークカウチンからの招待者の大部分がスキー経験がなかったから、こうした国際交流の側面を考慮しての設定だった。北緯50度（サハリンの中央部の相当）に近いバンクーバー島のレークカウチン村は海流や風向の影響で殆ど積雪がない地域である。

日程は札幌国際スキーマラソン大会前日で、ワールドロケット札幌大会参加の外国人にも配慮した日程とした。スキーマラソン大会の頭に「国際」を冠したのは、カナダやフィンランドからの参加者30～40人を見込んだからだ。

スタート地点は大滝村本郷の基幹集落センター前、フィニッシュは胆振線旧北湯沢駅前「平成ふるさと広場」である。旧国鉄胆振線跡の「平成ふるさとの道」利用は幅が3mと狭く比較的フラットなコースでアップダウンが少ない難点があったが、国道に近いこともあって応援者を見込まれることから選定された。小さい村でも、村ぐるみ大会を進めるといった心意気を館林村長は語った。

大会要項には「発祥地フィンランドよりクロスカントリースキー選手を招聘し、姉妹村カナダのレークカウチン村親善派遣団と国際交流を深め、冬を快適に過ごすために大自然の恵みを活用し、歩くスキーの普及と愛好者の親睦、交流の輪を広げる」と書いてある。

第一回大会時、人口1600人の村がカナダ人とフィンランド人を取り込んでクロスカントリースキー大会を開催することは当事者ですら成功への自信と見通しがあったわけではない。

英語通訳やフィンランド語通訳の問題は地元では消化しきれない。ノリコ・ヘグブロムや乗松良治（役場職員）らが英語、北海道フィンランド協会のメンバーがフィンランド語通訳を買って出て大会運営を進める以外なかった。

当初から国際交流と冬を快適に過ごすというノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻の理想が盛り込まれ、2人は大会役員の「顧問」に任ぜられた。

コースづくりに圧雪機械などなく、スノーモービルやスコップによる手作りのもので圧雪状態は決して良いコンディションには仕上がらなかったが、役場の関係者や大滝村の小中学生、村民が多数参加し、また多くはなかったが応援する人々もコース沿いに見られた。

大会役員である館林村長や菅原助役などスキー経験のない役場の首脳部もスキー滑走に参加した汗を流したのである。

大会では記録をとり、順位を決め、表彰もした。

レースに先立ち行われたデモンストレーションはハスキー犬12頭による犬ぞりの前走があった。

大会参加者は合計で326名、外国人はカナダの27人全員を筆頭にフィンランドなど合計30人（室蘭新報91年2月10日は60人）、国内は札幌、千歳、室蘭、伊達からの参加者と大滝村民である。フィンランドからの来村者はノリコとスチッグ・ヘグブロムの勧誘による人々で、宿は数年（第1回大会から5回大会）にわたり拙宅「仙流荘」を使い、なかには80歳代のクレ・リンドリュース（フィンランド）という年寄りもいた。スキーは滑らなかったが、2年続けて北湯沢温泉を楽しみにやってきた

老人だった。

第1回おおたき国際スキーマラソン大会後の反省点としては、最長8kmではやはり距離が短い、旧国鉄胆振線跡の利用ではコース幅が狭いなど出された。

クラシック用のトラック（溝）を入れられず、初心者やクラシックスキーヤーはフラットな雪面に悩まされた大会であったが、手作りであり、フィンランド人たちが大会企画に協力したことで意義あるイベントとなった。

1992（平成4）年2月11日の「第2回おおたき国際スキーマラソン大会」は、アップダウンがあったほうが楽しいし、滑りやすいということから本コースは旧国鉄胆振線跡の「平成ふるさとの道」を使うが、隣接する山地のなかに枝コースを設定し、距離も最長を20kmにした。

枝コースは長流川右岸流域の林間部、林道、畑地などを利用してつくられた。

スタート地点は大滝村本郷、ゴールは北湯沢であり、圧雪などでは千歳駐屯地の自衛隊員10数人が公民館「湯の里館」に泊まり込み、雪上車を使ってコース作りをサポートしたのである。

第2回大会は「道民スポーツ胆振冬季大会」と共催したこともあって、参加者は第1回大会の2倍にあたる581人に増えた。フィンランド人走者20人（男子16人、女子4人）のなかにはフィンランドを代表するヘイケ・キビッコ選手やフィンランド航空パイロットなど航空関係者もいた。また日本に在住するフィンランド人（北海道フィンランド協会メンバー）の参加もあった。あまりスキー経験のない姉妹村カナダのバンクーバー島中部のレークカウチン村からの参加者28人は全員が6kmに挑戦している。

この大会には全日本スキー連盟の和田代表も姿を見せ、参加者も旧大滝村だけでなく、伊達、室蘭、登別など胆振地区から千歳、札幌方面に広がりを見せた。

コースは20km、10km、6kmで昨年（1991年）実施した8kmは取りやめ

たのである。

第2回大会は小中学生が多数参加した。小中学生の参加を見込んで大滝村役場は学童用スキーを100セットあまり調達したのである。

基本コースは胆振線跡で1991(平成3)年に使用したコースを中心に変化を持たせたものであったがコース幅が狭いという難点があった。国道沿いはある程度観客に恵まれる利点もあったが山間部コースに応援者は殆どいなかった。ただし、山林、原野、畑地を通過するコースは北欧のようなメルヘンチックで幻想的な世界を演出した。

コースづくりは応援に来た自衛隊員が、機械力を駆使したため第1回大会コースに比較し一段と滑りやすい雪面に仕上がったのである。

「第3回おおたき国際スキーマラソン大会」は大滝村総合グラウンドを発着点に、円山方面に20kmのクロスカントリースキーコース、中級者用10kmコースと初心者用3kmコースを設定し、一部樹木を伐採して専用コースを、一部は冬季に使わない道路や畑地など利用した幅5mのスケータリングとクラシカルの平行コースをつくった。第1回、第2回大会とも異なる、長流川左岸の川べりと徳瞬瞥山々麓の農道や畑地を利用した全く新しい大会コースが設定された。それぞれが試行錯誤しながらのコースづくりであったが、大会に参加するスキーヤーに滑りやすさと大滝の美しい自然環境を提供しようとする心意気が表現されていた。

出発点は大滝村総合運動公園、コースは長流川左岸に沿って開拓橋をくぐり、豊年橋までは下る。そこから東に折れて一気に坂を駆け上がり、大滝学園を經由して円山地区の農道を走り、展望美しい徳瞬瞥山の山麓を北に進む。村営牧場のB牧区入り口を左折して一気に下り上野地区を經由して大成町から総合運動公園に戻るラウンドコースが最長の20kmだ。10kmと3kmは大滝総合運動公園から長流川沿いのほぼ往復(往路と復路は必ずしも一致していない)コースが当てられた。

第3回大会までも自衛隊員千歳駐屯地にコース整備や有線連絡網配線工事を依頼している。千歳自衛隊の第71戦車連隊の隊員20人は北湯沢「湯の里館」に1週間泊まりこんで業務を遂行したのである。

大会参加者はフィンランド（15人）、カナダ（26人）、フランス（4人）、スイス（3人）、オーストリア（2人）、ポーランド、アメリカ合衆国などの7カ国からの外国人64人を含め総勢423人だった。外国人であるが地方教育局や教育委員会、日本の企業や協会に所属する参加者6人がいた。

第3回大会からコクドの江川淳ら各種選手権などに登場するアスリートや高校のスキー部に所属する選手が加わるようになった。一流選手の競技会参加で優勝者を含む上位入賞者の記録は男女とも一気に縮小した。

外国人参加者はカナダからの訪問団20数名が全員3kmの短い距離を選んだのに対し、カナダ人以外の外国人参加者は最長の20kmに挑戦している人が多い。

圧雪車は函館にあるアルペンスキー場用のもの、ルスツスキー場所有のものなどゲレンデスキー場で使用しているものを借用してコース作りに役立てたのである。

タイム計測は日胆陸協所属で地元在住の加藤良隆（元大滝村優徳小学校校長）が、高度なノウハウを提供した。この結果、競技者の計時は、より正確になった。コースは長流川河川敷地が景勝であることから選定されたが、これには室蘭土木現業所の指導、理解が必要だった。20kmコースのなかには私有地である畑地を何箇所も通過している。こうした畑地利用のコース作りはフィンランドなどでは経験済みなことであると「フィンランディア・ヒーヒト（大会）」を自ら経験した藤田隆明が提案し、実現したのである。

農地を借用するには私有地使用に対する所有者の理解が得られることが必要であり、コースの設定上、重要かつ意義深い。臨時的措置とはいえ、畑地などをコースとして利用すれば、春先の農作業にいくらかなりとも影響がでる可能性があるからである。

3、初めての30kmスキーマラソンを実現（第4回おおたき国際スキーマラソン大会から第6回大会）

第4回おおたき国際スキーマラソン大会は1994（平成6）年2月11日（金）に大滝村総合運動公園を発着点として行われた。

この大会から男女30kmと上・中級者向け15kmの「クロスカントリーレース」、初心者・ファミリー向けの5km、3kmに「歩くスキー」種目の変更された。30km種目は15kmコースを2周するもので、徳舜瞥山々麓を周回する展望豊かなコースだ。

基本的には前年の第3回大会時の20kmコースをやや短縮して15kmコースとし、30kmレースはこれを2周する方式に変えたのである。

15kmコースは大滝村総合グラウンドを出発し、長流川沿いに溪流を眺めながら下流に進み、開拓橋をくぐり豊年橋（3km地点）から徳舜瞥山麓を登り詰め、大滝学園（6km地点）を横に見ながら標高550m（9km地点）等高線に沿って農免道路を北に向かって走り・村営牧場入り口付近を下って清見橋（12km地点）を通過し総合グラウンドにたどり着く標高差239mの厳しいコース。林間地と畑、農道などを利用する変化に富んだ雪道にクラシカル・トラックとスケーティングコースが整備された周回コースである。標高差があるため長流川沿いの谷の気温と丘の上の農免道路付近の気温差に対応するワックスワークが鍵になるといわれている。一部はSAJ（全日本スキー連盟）公認の常設コース、溪流コースも含まれている。このコースは基本的に以降の第18回おおたき国際スキーマラソン大会まで踏襲されていくのである。

初心者・ファミリーコースは長流川河畔を周回する風光明媚な林間地帯で比較的アップダウンの少ない地域が選ばれた。

参加者総数は563人。外国勢も参加したが、フィンランド人参加者は相変わらずノリコ・スチッグ夫妻による呼びかけによって遠くフィンランドから遠征して参加した人たちが多かったが、ワールドロペットレース札幌大会と参加をダブらせているひともいた。

第4回大会で選手宣誓を行ったのは九州大工学部出身で大滝役場産業課職員として通産省から出向していたの香月栄伸選手であった。同氏は

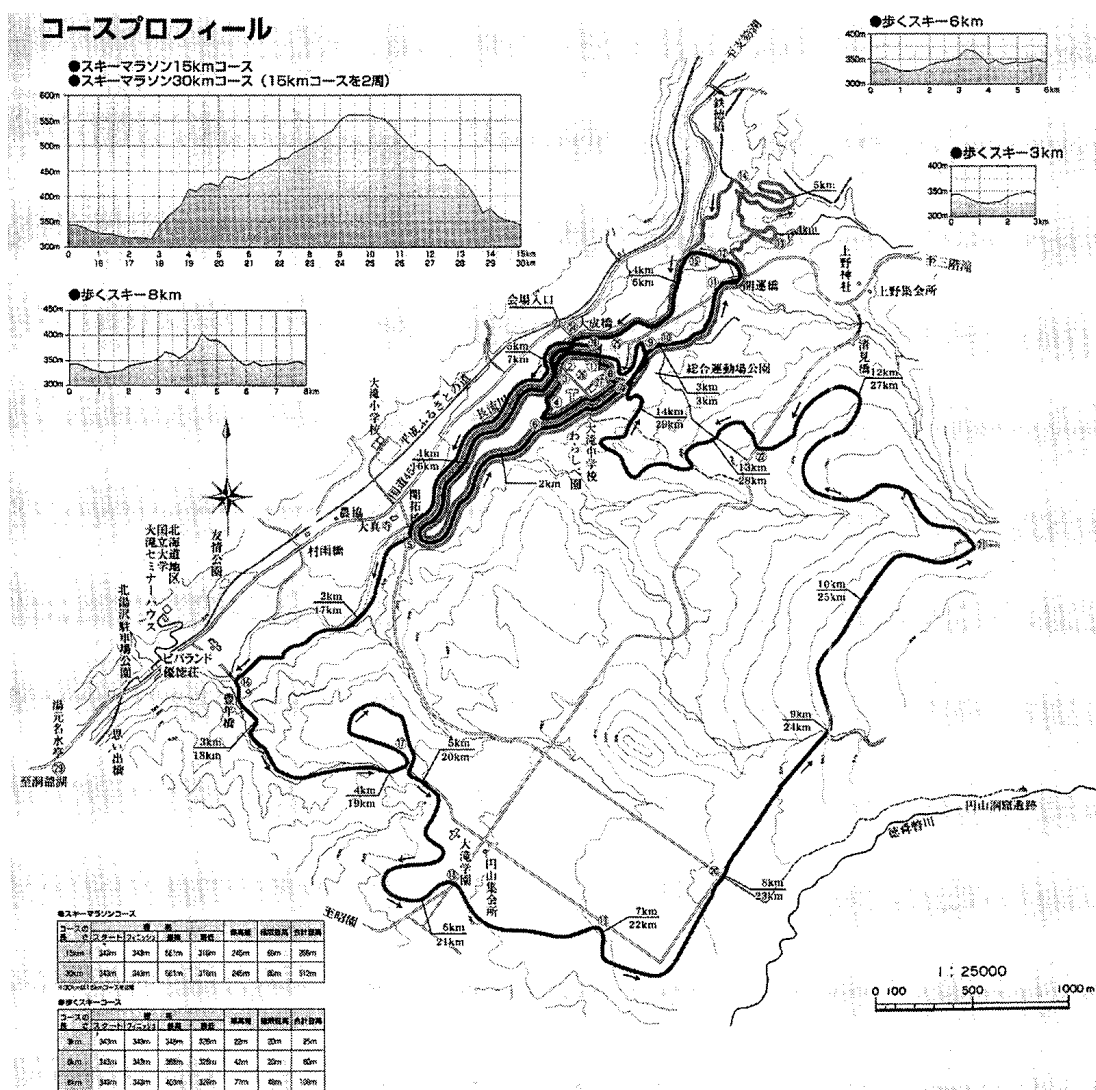


図1 おおたき国際スキーマラソンコース図

2年後に同じ九州出身の「緑のふるさと協力隊」の岩下靖子と第6回大会のスキー大会特設会場で結婚式をあげて話題を呼ぶことになる。

「第5回おおたき国際スキーマラソン大会」は1995（平成7）年2月11日（土）、「道民スポーツ大会胆振大会第9回歩くスキーおおたきの集い」として挙行された。参加者884名もこれまでの最高で、年々参加者人数が伸びてきている。

開会式はこれまで大会会場の屋外で出走直前、寒風と雪のなかで行われてきたが第5回大会から開会式と歓迎レセプションを兼ねて前夜祭で行うことになった。会場は北湯沢グリーンヴィレッジ(現ホロホロ山荘)

の大広間である。外国人参加者やワールドロペットマスターなどが壇上で紹介された。こうした前夜祭方式は毎年世界14カ国で開催されるワールドロペット大会(クロスカントリースキーの国際大会)様式に倣ったもので、北海道では札幌国際スキーマラソン大会、美瑛町の宮様スキー大会、オホーツク斜面で行われる湧別原野スキー大会でも取り入れている。大会外国人スピーチの通訳は、ノリコ・ヘグブロムや私の長男、進藤洋一(北大・院)がつとめた。

招待選手の1人、アメリカのエドワード・マクマホンはクロスカントリーの全米記録を有する選手である。この大会は初参加であったが、大会の雰囲気は大いに盛り上げた。

また、この大会から15km以上の種目を完走した場合のご褒美参加賞として長芋一箱(時価2000円)が贈られ、これまで通りキノコ汁や北湯沢温泉無料入浴券も配られた。

長芋は地元大滝村の特産品であり、以後参加者のなかには参加賞の長芋をお目当てにおおたき国際スキーマラソン大会に参加する傾向が強まり、長芋効果は道内に知れ渡った。

宿泊施設は北湯沢山荘緑館(宿泊可能人数368人、以下同)、横山温泉ホテル(100人)、北湯沢山荘(30人)、御宿竜松庵(27人)、ペンションたかはし(15人)、鯉の里なかむら(30人)、北湯沢ユースホステル(34人)を指定、ユースホステルを除き特別宿泊料金は平常料金の15%引きとして参加者の便宜をはかった。

第6回大会は1996(平成8)年2月11日(日)、好天の徳舜瞥山々麓を中心に30km、15km、8km、3kmの4種目で行われ、この種目構成は以後、女子の30kmを除いて踏襲されることになる。

参加者は外国人39人を含め760人に達した。姉妹村であるカナダ、レークカウチン村からの参加者は当初3kmの種目が多かったが8kmにもエントリーするなど歩くスキーへの技術的進歩が見られた。

障害者療養の村として知られていることを背景に、身体障害者の参加数も増えた。北湯沢リハビリセンター、わらしべ園、おおたき学園、ビ

バランド優徳荘（以上大滝村）、太陽の園（伊達市）など障害者施設からの参加者も38名に達した。障害者はシットスキー（車椅子を改良したような椅子スキー）など用い3kmと8kmコースに挑戦した。シットスキーにはブレーキがついていないし、方向をコントロールするものがない。

コース幅と傾斜、角度がシットスキーに向いているコースづくりが要請されたのである。

またグリップするものがないので急な登りでは腕の回転だけでは下に滑り落ちてしまう。難度の高いテクニックが必要なだけ筋力、腕力、技術力もまた高度になる。

障害者にはアシスタントが同行することもあり、学校関係者などがその手伝いをかって出ている。また、障害者が実行委員会のメンバーに登録された。

シットスキー参加者は夏は車椅子マラソンに参加し、冬は歩くスキーコースで練習している人も多い。

フィンランドからの参加者のうち5人はラップランド地方、北極圏線上の街ロバニエミのオーナスヴァーラスキークラブのメンバーで、おおたき国際スキーマラソン大会には初登場であった。オーナスヴァーラスキークラブメンバーの来日にはスチッグ・ヘグブロムが関わっており、この招待をきっかけに大滝村役場関係者4人が同年3月、ラップランドの北極圏、オーナスヴァーラの丘がある街ロバニエミなど視察することになったのである。

外国人参加者のなかにはフィンランド大使館関係者、フィンランド航空会社のメンバー、北海道・フィンランド協会関係者、姉妹村カナダ、レークカウチン村の人々が含まれていた。レークカウチン村関係者は文化交流使節団のメンバーで、大滝村の各家庭に1週間ホームステイし、日本の文化を学ぶ目的で来日した人々であり、ホームステイの時期をおおたき国際スキーマラソン大会に合わせる設定にしたのである。

大滝村はこの年「雪体験ふるさとスキーツアーコース整備事業」の一環として排気量4000cc、総重量（作業機を含む）3600kgのスキー場整備の圧雪車を購入した。重機の購入により大滝村総合運動公園から長流川

沿いの海運橋、開拓橋、豊年橋を經由して折り返す常設8kmコースが完備した。コース幅もゆったりでスケーティング用とクラシカル用のカッタートラックを整備し、札幌も含めた近郊地域で最も整備されたクロスカンリースキーコースと評価を与えられ、SAJ（全日本スキー連盟）の公認を受けるに至った。

日々、刻々と移り変わる自然界の森林や野鳥、川の流れ、雪や氷の造形美を堪能できる、また野趣溢れるメルヘンチックな常設コース整備が可能になったのである。

常設コースは12月中旬から3月末（積雪量の大小で4月までオープンする時もあった）まで圧雪作業は毎日続けられた。降雪の多いときには1日2回の圧雪作業で、利用者に良好なコースコンディションを提供した。

4、大会優勝者はフィンランドに派遣、飛躍的に充実した大会に（第7回おおたき国際スキーマラソン大会）

第7回おおたき国際スキーマラソン大会は、1996（平成8）年2月11日の建国記念日に行われた。

この大会では、特別賞として男子30km、男子・女子15kmの優勝者合計3人をフィンランド北部ラップランド地方のムオニヨ村オロスの街を中心に繰り広げられる「ラップニア・スキーウイーク」に旅行券を出し、招待するという特典がついた。

ラップニア・スキーウイークは月曜日60km、水曜日50km、金曜日80kmを走り3レースの総合タイムで順位を決定するものである。フィンランドを含むヨーロッパ各地から数百人規模の参加者が集まるが、そのなかにはワールドカップ出場者などアスリートも多数含まれている。大滝村がこの年招待した選手は進藤隆（自衛隊冬戦教=22歳）と青野範子（天塩アイアンマンクラブ=30歳）だったが、2人の成績はともに8位であった。引率は大滝村教育委員会の藤田隆明、応援団はFIN SKI 50Kの福士久美子事務局長、渡辺工芸店の渡辺勇であった。

ラップニアスキーウイーク（ラップランドのスキーウイーク）招待の

特典つきレースということで第7回おおたき国際スキーマラソン大会には道内の競技スキーチームのメンバーの参加も目立った。

ラッポニアの中心集落はフィンランド北部のオロスやムオニヨである。フィンマルク地方は北緯68度に近くスウェーデンやノルウェーの北部の国境線近くであり、北極圏内の街である。夏は避暑地の性格を有し、冬はオーロラ観光で賑わう保養地であり、森林のなかや湖のほとりに多くのホテルやロッジが建てられている。

第7回おおたき国際スキーマラソン大会の参加者は831人、大滝村の小中学校生徒のエントリーが8km、3kmに集中しているため、この合計が578人と全体の70%になり、短い距離の走者比率の高い傾向が続いていたが、15kmエントリーの175人は過去最高であった。30kmの78人も過去最高に近い数値である。

この年、胆振線北湯沢駅跡に「湯元名水亭」が誕生し、北湯沢温泉全体の宿泊可能人数は、全村民数を超えるとなった。また「御宿かわせみ」（宿泊可能人数23）も指定旅館となって村外からの宿泊状況は一挙に広がった。

開会式、前夜祭が土曜日、大会が日曜日に定着したため、大会参加者の30%は北湯沢温泉の宿泊施設を利用していることがわかり、地域経済活性化に寄与していることが理解できる。

国際交流の、もう一方のカナダ、レークカウチン村との交流は2つの目的で推進されてきている。

1つは英語指導助手（AET）が毎年レークカウチン村から派遣されてきており村人は英会話教室を開いて児童からシニアクラスの年齢層まで語学を楽しむ。もう1つはこの年、第12回目の親善使節団を大滝村からレークカウチン村に派遣した。人数は25人程度、約1週間現地でホームステイなどして過ごすことになるが、派遣費用の半額は村（自治体）が補助している。

そして、レークカウチン村の親善使節団は2月はじめ、おおたき国際スキーマラソン大会参加も兼ねて来村することが慣習化した。

国内参加者にとっては、「温泉に泊まって前夜祭を楽しみ、スキー大会で汗をかき、また無料温泉券でレース後の体汗を洗い流し、完走賞の長芋段ボール1つもらって帰途につく」楽しいスキーで冬の2日間を過ごすゆとりのスキー大会が定着した。

ヘグブロム夫妻は1995(平成7)年12月7日付け村長宛書簡で「今後、大滝村を日本一のクロスカントリースキーセンターにするためには特別なアイデアが必要だ。それにはまずフィンランド一番のスキークラブとスキー大会を視察することが必要だ。3月29日は私自身、このクラブから招待を受けている。」として村の関係者に北欧スキー視察の同行を求めたのである。

1997(平成8)年、横山武村会議員、宇佐美雅昭教育長、片川善明企画財政課長、藤田隆明社会教育課長補佐など4人が9日間の予定でフィンランドの北部、ロバニエミ、オロス、キッテラ、ムオニヨのスキー先進地視察に出かけた。

研修の結果は第3回おおたき国際スキーマラソン大会のコース選定、休憩所「キートスマヤ」の建築、その他大会運営の隅々まで生かされていた。

館林俊圀村長は「人材育成のため、役場職員をフィンランドやボストンに派遣した」と趣旨を述べたが、ボストンマラソン大会へは大友猛役場職員、岡崎基体育指導委員長、田淵明スキー協会会長、藤田隆明役場職員の4氏が赴いた。これは多くのボランティア団体が大会を運営する状況を見て、おおたき国際スキーマラソン大会に参考にして欲しい、というノリコ・ヘグブロムの要請にもよるものであった。ボストン在住のノリコは4人の到着からボストンマラソン事前準備、参加(藤田は42.195kmを完走して走者の立場で大会運営を見た)、運営方式事後の後始末を観察した。

第2節 大会参加者1000人を超える

1, ラップニアスキーウィークに参加(第8回～9回おおたき国際スキーマラソン大会)

第8回大会おおたき国際スキーマラソン大会は1997(平成9)年2月1日(日)大滝村運動公園の既に定着した徳瞬瞥山麓周回コースを使い30km、15km、8km、3kmの4種目で実施された。

大会に先立ち北湯沢グリーンヴィレッジで開かれた前夜祭でFIN SKI 50K スキークラブが結成されたことが報告された。フィンランドと大滝を結びつける相互交流スキークラブの誕生である。

このクラブは、おおたき国際スキーマラソン大会に協力する目的で立ち上げたが、フィンランド人でアメリカ在住のスポーツジャーナリスト、スチッグ・ヘグブロム氏が代表となり、館林村長を名誉会長とした。

第8回大会の参加者は初めて1000人を超え1006人になったが、以後18回大会まで大会参加者が1000人を切ったことはない。道内で数多く開かれているスキーマラソン大会が年々参加者を減らしているなかで、おおたき国際スキーマラソン大会はしっかりと大地に根を下ろしていった。

おおたき国際スキーマラソン大会の参加者が減少しない理由は、スキーコースの整備とコース取りのよさ、コース沿いの自然景観の美しさ、温泉や休憩施設、夜間照明施設が整っているとの評価が高いからであり、また常設コースでのクロスカンリースキー練習が大会参加への後押しをしている。

第8回大会参加者の出身地をみると、フィンランド19人など外国勢32人、道外9都府県18人、大滝在住者村231人、室蘭市131人、登別市70人、伊達市65人などを含む胆振支庁管内627人、胆振管内以外の道内では札幌市の218人、千歳市の63人など437人となり、大滝村近隣市町村からの大会参加者が多いことが分かる。

この大会でも身体障害者施設わらしべ学園の46人など教育施設からの参加者が多数を占めた。これは村民と障害者が日常的に相互扶助やサポート態勢にあることの証明で、他の市町村自治体では見られない特筆

すべき事柄である。

フィンランドから30km競技に参加したヘイケ・マキ、ペッカ・ロットジョネン、マーク・ソーサ、J・P ニーニマキらはいずれも30代の若者、ワールドロペットを転戦してきた人々でロペットマスターの手帳やメダルを持参し、スキーマラソン参加者に世界14カ国で行われているワールドロペットレースに出るよう働きかけていた。

フィンランド人のワールドロペット参加者は多く、ロペットマスターの称号をもつ人数も世界でドイツ、スイスに次いでいる。

第8回おおたき国際スキーマラソン大会で協賛者として寄付など寄せた会社・企業および団体はサッポロビール、地元の旅館組合、建設業協会、観光協会やホテル、旅館などだったが、遠くはダイヤワックス社、サラモン社、フィッシャー社、フィンランド航空なども協力した。

青森県のオフィスミブラ（有）発行のクロスカントリースキースポーツ紙「NOR NOR」は1998（平成10）年3月号で「おおたき国際スキーマラソン」を取材し、6ページに渡って詳細な記事を掲載した。

見出しとリードには、「小さな村から発信する北海道のでっかい大会」、「人口1600人の小さな村に1000人のスキーヤーが集まる」と書かれている。

記事の終わりには「オープンですがすがしい印象を受けたおおたき国際スキーマラソンだった。小さな村でも1つの目標に向かって皆で努力していけば必ずいいものが出来ていく、そのお手本のような大会に思えた。村のなかで足りないところは他の地域や人との交流の中で協力を仰いで乗り越えていく。ボーダレスな意識はイベントを成功させていくだろう。こんな大会を作っていきたいという明確なイメージを持っている、そのイメージの質が高ければ高いほどスキーヤーが本当に参加したい大会になっていく」と結んでいる。

第9回おおたき国際スキーマラソン大会は1999（平成11）年2月7日（日）、1144人の参加者、30km、15km、8km、3kmのコースで行われた。スタートとフィニッシュがおおたき村総合運動公園であることはこれま

でと変わらない。

参加者の出身地域をみると、外国人ではフィンランド19人を筆頭にカナダ、アメリカ、オーストラリアが32人、道外18人、胆振管内627人、胆振を除く北海道が437人である。

フィンランドからの参加者は40歳以上のいわばシニアクラスの人が多く、世界の大衆スキーレースを転戦してスキーや国際交流を楽しむ傾向が強い。

いつものようにフィンランドからの参加者が多いのは、ノリコとスチッグの勧誘が大きな力になっていること、大滝村とフィンランドの交流が盛んになってきた証拠でもある。

この大会で初めてRCチップ（ランナーズ・チャンピオン・チップ＝小型無線発信機）が取り入れられる。小型発信機をスキーヤーのブーツの足首付近に巻きつけることによってゴールでの計時が自動的に完了するものである。

RCチップの導入はスキーの選手権大会などでは珍しくないが、道内の1000人規模以上の一般人を含めたクロスカンリースキー大会では初めての試みであった。

チップ導入により、装着しない参加者はタイムが記録されないし、参加賞も受け取れないことになる。また、一斉に5～10人がフィニッシュした時など、計時が混乱しタイムの取り忘れを防ぐために重要な役割を果たした。

これまでもそうであったが途中通過制限時間が設定されており、30kmの場合は中間地点15kmを1時間45分、22.5km地点を3時間20分以内で通過することが義務付けられている。また15kmはトータル240分以内、中間点通過2時間30分となっている。

30km、15km参加者にはスキー板にシールを貼り検査を受けることも義務となった。

レンタルスキーはスキー板、ポール、ブーツの三点セットで2500円で貸し出す態勢も完備したのである。

北湯沢温泉など宿泊施設と競技場を結ぶ無料送迎バスも運行され参加

者の便宜を図った。

大会運営上重要なことは、主催者はもちろん教育委員会や体育協会を含む村が一丸となって大会を作り上げる情熱とスキー先進地に学ぶ意欲に満ちていることだ。

加えて北海道新聞社、北海道文化放送、室蘭民報などのマスコミ各社、室蘭地方スキー連盟や北海道歩くスキー協会も加わって幅広い団体や会社の協力を仰いだ。

後援には、フィンランド政府観光局、フィンランド航空、北海道フィンランド協会などフィンランド関係者の協力、NHK札幌放送局、北海道カナダ協会、道教委、道体協、道スキー連盟など幅広いサポートが得られている。

労力の面で支援したのは千歳市の陸上自衛隊第7師団台第71戦車連隊がコース設営や運営支援を行い、近隣市町村のスキーパトロール赤十字奉仕団は救護や病人対応で協力してきている。

また、クロスカントリースキーコース5kmが全日本スキー連盟(SAJ)から公認常設コースとして認定を受けたため、東京をはじめ九州などからも実業団チームの長期合宿者が次第に増える傾向になってきた。SAJからはコースどり条件はスキー愛好者にも一線級選手にも適応した高度なものと評価された。

2000(平成12)年の6月10日(日)、「第一回おおたき国際ノルディックウォーキング」が開催された。

これは、前年大滝村に1カ年滞在し、クロスカントリースキーやノルディックウォーキングを指導していたフィンランドの著名なスキーヤー、リレハンメルオリンピックフィンランド代表選手トピ・サルパランタと大滝村教育委員会の藤田隆明の提唱ではじまった。

フィンランドでのポールウォーキングは極めて一般的な国民の散歩方式や健康歩行である。スキーに使用するポール(ストック)によく似た夏用ポールを使い、街の中や郊外、野山などを歩くものである。最近、登山客のなかには折り畳み式ポールを一本携えて山を上り下りする人が

増加しているが、ポール2本を使ってまちなかを歩く人は減多に見かけない。街を歩くにはポールの先に専用のゴムカバーをつける。2輪駆動より4輪駆動の方が楽で安全、体全体のバランスをとる意味でも使い始めると習慣化するのである。北欧ではいたるところポールウォーキングする人々を見かける。

ポールは札幌市内で「札幌スキッツ」、「パドルクラブ」、「石井スポーツ」、「ニッセンセントラル」などが販売している。店の話では「売れ行き良好、ノルディックウォーカーが増えているせいでしょう」という。

2. 外国人留学生など47人が参加（第10回おおたき国際スキーマラソン大会）

第10回大会は2000（平成12）年2月5日（土）にグリーンヴィレッジで開会式と歓迎レセプションがあり、競技は6日大滝村総合運動公園を起点と終点にして30km、15km、8km、3kmの4種目で行われた。参加者は外国人を含め1073人だった。

10回目の区切りと「ミレニアム2000」の記念すべき大会だったのである。

外国人では常連国のフィンランド人が16人、アメリカ人12人、中国人11人のほかカナダ、イギリス、メキシコ、ニュージーランド、ドミニカ、エルサルバドルなど合計47人に達した。中国人をはじめとする外国人が目立ったのは北方圏交流基金助成事業による北海道内の大学、高校に在学する外国人留学生を招待したからで、大会は例年になく豊かな国際色に彩られた。

日本人では道外参加者は13人、胆振管内616人、内訳は地元大滝村が257人で村人口の5分の1に当たる参加者があった。これに室蘭市、伊達市などが続いているが、胆振を除く道内勢は397人で札幌、千歳、恵庭、京極、江別の市町の参加者が多かった。

クロスカントリースキーの本場、フィンランド中部の街ヴォカティからは4人のジュニア選手が参加した。

ヴォカティの街区は周辺がいくつもの湖と森林に囲まれた静寂な土地

地域社会の活性化とスポーツ文化の振興(クロカンスキー・ノルディックウォーキングの村づくり=旧大滝村を事例に)

柄でフィンランドクロスカントリースキーのメッカの1つであり、ここには1年通してスキー滑走できるトンネルコースが設置されている。

盛夏でもトンネル内は雪が保存され、冷凍機が回転しているからスキー滑走が可能だ。フィンランドで初めてだけでなく世界初のトンネルスキー場敷設地となったことで知られている。

複合競技に利用されるジャンプ台は夏も使用可能であるから、通年して世界各地の競技スキーヤーが練習に訪れる地域である。

スキートンネルは僅か1.2kmのアップダウンを含むスケータイングとクラシカルのコースで春先、天然の雪をトンネル内に敷き詰め、-4度C程度の室温を春、夏、秋の3シーズン保つ方法で管理されているのだ。周辺には一流ホテル並みの選手用宿泊施設が完備しており、夏のトンネルスキー場利用者は多いときで1日600人を超える。

日本の複合競技エース高橋大斗選手も2006年7月、この街出身のトピ・サルパランタをコーチにここで練習を積んでいた。

30km走者と15km走者は年齢別が適用され、男子は40歳未満の青年クラス、40歳から60歳未満の壮年クラス、60歳以上のシニアクラスに分けて順位を決めるよう細かい配慮がなされた。最長年齢参加者は77歳だった。

女子は30kmクラスは設定されていない。15kmは40歳未満と40歳以上の2クラスに分けられた。この大会最年長者は68歳である。

この年、おおたき国際スキーマラソン大会創設とフィンランド交流を進めた館林俊圀氏が村長職を引退し、渡辺實村長に交代した。

3, エントリーセンターで受付はじめる (第11回おおたき国際スキーマラソン大会)

2001(平成13)年2月4日(日)「第11回おおたき国際スキーマラソン大会」が開催された。連日の大雪と強風、低温でコースや大会諸施設の設定に困難を極めたが、当日の天気はまずまずのコンディションに回復した。

大会参加者は道外7都府県、道内54市町村、海外は4カ国8人、村内

からは小中学生110人、障害者のわらしべチーム39人を含む226人の合計1147人。これまでの最高人数となった。

この大会は新たに6km競技が付け加えられた。3kmでは短すぎ、8kmでは長すぎの参加者に便宜を図ったのである。

アシスタント（補助者）を伴う盲目の選手やシットスキーの障害者も気軽に参加できるよう配慮した。

最高齢は大滝村在住の小熊千代80歳で、1996（平成8）年伊達市から移り住んだ女性である。もともとゲレンデスキーをしていてスキー検定2級の腕前だったが、おおたきクロスカントリースキーコースの整備状況や長流川沿いの美しい林間コースに魅せられて大滝の常設コースで練習し、4年連続して大会に参加している。

第4回大会以降、ほぼ固定しているスキーマラソン大会のコースについて紹介しておこう。

30kmは15km2回の周回コースになっているから参加者は1周して出発点の総合運動公園を通過、再び周回コースをもう一度回るというものである。（図1を参照）

北海道内の大会でみると、旭川バーサ大会、札幌国際スキーマラソン大会、千歳ホルメンコーレン大会などは周回コースを利用する。これはスタートとフィニッシュが同一場所であるから大会運営上の利点はある。

湧別原野スキーマラソン大会、美瑛の宮様スキーマラソン大会、十勝原野スキーマラソン大会、野幌スキーマラソン大会などはいわゆるワンウェイ、つまりスタート地点とフィニッシュ地点は異なる。この方が遠くに来たという到達感があり、地形など利用して下りの距離を伸ばすこともできる。スウェーデンのバーサロペット大会90kmレースはスカンディナヴィア山脈の中腹辺りのセーレンから一方的に下ってモーラを終着点とするコースであるから走るのが楽で気分がいい。だから距離が長い割りに多くのスキーヤーが出場する大会になっている。バーサロペットは一大大会平均5万人近い参加者だから1日では大会が消化できない。1週間を3日間に分けて行われることもある。

湧別原野マラソン大会も白滝、丸瀬布、遠軽、上湧別と湧別川に沿って60kmは下りであり、下りが多いコースとして知られ参加者は7000人に達する。国内の大衆クロスカンリースキー大会では最も距離が長いものだったが、諸般の事情で2008年には50kmに縮小された。

「おおたき国際スキーマラソン大会」もワンウエーを考えるとすれば、近隣市町村に跨るコース設定を企画する時期にきているかもしれない。大滝区から隣接の壮瞥町を経て伊達市の中心部に達するコースづくりを考えてもいい。実際、フランスで行われているトランスジュラシエンヌ86kmは一部国境を越え、スイス国内を走ってまたフランス国内に入るコース設定になっているのである。スイス国内で応援するひとびとのなかには、フランス人が通過するとスロー、スロー、ダウン、ダウンと叫び、スイス人が通過するとアップ・アップと叫ぶなど奇妙な声援を送り、国際色の豊かさを表わしている。

もう1点はコースの高低である。おおたき国際スキーマラソン大会の出発点は標高340mの総合運動公園だ。30kmと15km参加者はスタートしてから3km程度は長流川に沿って標高差30mほど下り、そこから一気に6km、250m標高差を駆け上り、ややフラットのように僅かに下るコース1.5kmを北に移動し、その後4.5km、標高差220mを一気に下るかなり過酷なコース取りになっている。

上級者には大変面白いコースである。中級、初級者には厳しいとの評価も出ているが、現在のところ1000人以上を集められる大会であるから文句を言うひとはいないようだ。

30km競技の優勝者は、北海道知事杯を授与するが、第4回大会から第10回大会の勝者の記録は男子で1時間23分から1時間43分の間、女子では30kmレースは第4回大会から第6回大会で最高1時間55分、第7回から第10回大会は15kmに縮小され48分が最高タイムだった。

この年の夏、おおたき国際スキーマラソンの創設と運営に関わりフィンランドから多数の参加者を毎年、この大会に導いたノリコ・ヘグブロムがアメリカで死去し、12回大会プログラムから顧問の名前が消えた。この大会の創設から発展期を支えた夫のスチッグ・ヘグブロムは夫人亡

き後も、クロスカントリースキーを村人に根付かせるさまざまな提言を行ってきた。

スキーヤーの常設休憩所、ワックスルームを備えたキートスマヤ建設の提言、北海道で初めてのナイター照明（夜スキーヤーが自由に点灯、消灯は自動で21時）スチッグ・ヘグブロムが火付け役になってきた。

4、参加者は広域市町村に拡大（第12回おおたき国際スキーマラソン大会）

第12回おおたき国際スキーマラソン大会は、2002（平成14）年2月2日（土）、3日（日）の両日に渡って行われたが、開会式と歓迎レセプションを含む前夜祭はホロホロ山荘に約150人が参加して行われた。

翌3日の大会参加者はフィンランドなど海外4カ国から13人、道外6都府県から14人、道内59市町村から907人（うち大滝村210人）の合計1144人だった。

距離別にみると30kmは102人、15km344人、8km、6km、3kmを合わせて698人であり、上級者の競技スポーツの大会という性格よりも、冬の1日をのんびりスキーを楽しもうとする人々の大会であることが伺える。

大滝村が札幌、千歳、室蘭などからの交通の便がよくないことを考慮して、千歳空港までの間に無料バスを配置した。大会が終わった後の足としてである。

多くの大会参加者は当日、自家用車や所属スキークラブが用意したバスなどで大会会場に乗り入れるが、外国人参加者にはそれができない。帰路、札幌、苫小牧方面は千歳駅からの鉄道の便を利用する。

前日からの参加者は、名水亭の無料送迎バスなどを利用するが、大会終了後のバスがないから村による無料バスの提供となったのだ。

北湯沢温泉街と大会会場である総合運動公園の間は大会開始前2便、大会終了後1時間置きに4便の無料バスを用意して参加者の便宜をはかった。

大会の記録計測に使う小型無線発信着器（通称チップ）は、参加者が

個々に足首に巻き付けるが、大会終了後返却せず持ち帰ることもあるので、紛失した場合は1500円のペナルティを課すほか、参加賞で完走賞の長芋段ボール箱はチップと引き替えに渡すなどの工夫もなされた。

参加料は30km、15kmが3000円であるが、参加賞（完走賞）とキノコ汁、温泉無料券などが配布され、8km、6km、3kmは1000円の参加料を支払うが段ボール箱一杯の長芋は提供されない。だから大会会場ではほぼ同額の長芋を購入することは可能にすべく販売することにした。

前夜祭である開会行事、歓迎レセプション、交歓会なども単なる大会役員の挨拶に終わらせず、外国人参加者の余興やアトラクション、ワールドロペットマスターの紹介など、世界14カ国で開かれているクロスカントリースキー大会を彷彿とさせる内容を織り込んだ。この辺りにもスチッグ・ヘグブロムらの提言があった。前夜祭の参加者は150人は超えている。

レンタルスキーはスキー板、ポール、ブーツの3点セットで3000円になったが、希望者は大滝村優徳町の取次店「こころ」に申し込めば借用できることをプログラムに明記した。

ところで、大会要項の中に「後ろから来た選手からバンフライを告げられたら、速やかにコースを譲る」の項目がある。これは30km走者と15km走者が同コースを走り、30km走者は15kmコースを2周するため、早い30km走者が、遅い15km走者を追い越す状況が生まれるからである。これはワンウェイコースやラウンドコースでも1周で終わりの場合は見られないもので大変ユニークである。遅い参加者には風が舞うように追い越していく競技者にしばし感動するもので、見よう見まねでその技術を体得しようとするのだ。

第3節 コース、設備とも北欧水準に匹敵

1. 常設コースに夜間照明点灯（第13回おおたき国際スキーマラソン大会）

第13大会は2003（平成15）年2月1日（土）前夜祭、2月2日競技会の日程で行われた。

大会参加者は30km92人、15km362人、8km272人、6km212人、3km184人の合計1122人が大滝高原の冬の雪原を楽しんだ。

地域別参加者はフィンランド、アメリカ、オーストリア、イギリス、カナダ、中国から19人である。外国人参加者にも理解できるようプログラムは日本語と英語で記されている。「Mayor's Greeting, Notice to Participant, Point to Notice of Timing Record」の内容が英文でも書かれた。

国内参加者は8都県13人、北海道は胆振管内566人(うち大滝村195人)胆振管内を除く道内が524人、札幌市の217人は大滝村の参加者をわずかに上回っている。

男子30km、女子15km勝者には北海道知事杯が贈られた。

男子の知事杯取得者は当初からコクト(江川淳2回)、同和興業(山崎正晴)、東京美装(岡本英男・島田武彦)、冬戦教(福士鎮顕)などのように競技選手団体、競技クラブ所属者が多い。女子はフィンランドのKyllikki Lindholm、名寄歩くスキー協会(松本あい子2回)、天塩アイアンマンズクラブ(青野範子2回)、札幌真栄中学校(渋谷洋子2回)など競技選手というよりスキー愛好家の知事杯獲得が目立っている。

女子の松本あい子や青野範子のように夏、水泳・マラソン、自転車の3種をこなすトライアスロンを兼用する人々も混じるようになった。

日常、大滝スキー常設コースで練習している女性のなかにはドイツのロマンチック街道南のヘッセンから北のフランクフルトまで750kmを自転車走行した経験を持つ人がいる。

クロスカントリースキー愛好者には夏トライアスロンや登山、ロードウォーキングやハイキングで体を鍛え、冬はスキーや冬山登山で楽しむ通年型アウトドア派が目立つ一方、おおたき国際スキーマラソン大会には中高年者の参加比率が高いことも特徴である。

平成12年、日本で初めて発足したのではないかと思われる「おおたき国際ノルディックウォーキング」は平成19年8回目を迎え、7月29日(日)、ほぼおおたき国際スキーマラソンコースと重なる緑豊かで風光明媚な長流川沿いの専用トレイルで行われた。参加者は400人を超えた。大滝村人口に換算すれば約3分の1の参加者である。専用路には木製

チップが敷き詰められ、アップダウンもあり、小鳥のさえずりを聞き、野の花を愛でて約10kmをそれぞれ自己の能力に合った速度でウォーキングする。

この大会への参加者は、大部分が冬のクロスカントリースキー愛好者と重なっているのである。

渡辺實大滝村長は第13回スキーマラソン大会の挨拶で「大滝村は冬季だけに限らずフルシーズンの健康、保養、休養を目指して村づくりをしている。春から秋にかけてはフィンランドで盛んなノルディックウォーキングの常設コースを整備し、森林浴を楽しみながら健康づくりを全国に発信している」と語った。

常設スキー場のなかでこの年はじめて簡易夜間照明が灯された。当初は関係者手作りの工事用パイプの先に投光器をつけた背の低い簡易なものであるだったが、夜間スキーを楽しむ人々には朗報だった。キートスマヤにスイッチを取り付け、利用時間は午後9時までとしたが、利用者はコースにスキーヤーがいるかどうか確認し点灯、消灯するように工夫されていた。

アルペンスキーのナイターのような寒さを感じないのがクロスカントリースキーであり、エネルギー消費に伴う発熱で、身体温度はいやが上にも上昇するから、これまでもわざわざ月夜にスキーを楽しんだ人々もいたほどである。

村民手作りの簡易ナイター施設の設置は、2年後に本格的な夜間照明施設への予備段階として貴重であった。

この年から大会の名誉顧問は堀達也知事から、高橋はるみ知事になった。

高橋名誉顧問は挨拶のなかで道外や海外を含め、毎年1000人以上が参加する魅力、交流と友好の輪を広げるよう期待すると挨拶した。

2, 障害者がシットスキーで参加 (第14回おおたき国際スキーマラソン大会)

第14回大会は2004 (平成16) 年2月1日 (日)、これまでと同じよう

に大滝村総合運動公園会場を中心に長流川沿い、徳舜警山々麓の特設コースで行われた。男子30km、15km、8km、6km、3km、女子は30kmを除くそれぞれのコースが利用された。

参加者は外国人がフィンランド、アメリカ、中国、カナダ、ニュージーランド、イギリスで18人。うち11人は初心者で3kmにエントリーしている。道外は関東以北9都県で18人、北海道は胆振管内大滝村の173人を含む516人、胆振管内以外の道内は札幌市の289人を含む615人で合計1167人に達した。15km参加者400人は史上最高の人数になった。

胆振管内からの参加者が約半数を占めていることからローカル色の強い大会だが、300人近いスキーヤーが札幌市から参加しているのも心強い。

人気の秘訣はいくつもある。第一は雪さえあればコースオープンが12月中旬(3週目の日曜日)であること。札幌白旗山スキー場は新年になってからオープンや滝野公園スキー場が12月下旬のオープンと比べ1週間～2週間早いのである。待ちきれないスキーヤーは中山峠の自衛隊クロスカントリー練習場や大滝村に向かう。第二はコース整備状況が格段にいい。これまで大滝在住の山城一郎が早朝圧雪車を走らせて整備し、積雪が続いている日などは昼間にも圧雪することもある。札幌市内のスキー場は毎日圧雪するとは限らない。特にシーズンの終わりに近づくと利用者も減るから圧雪しない日も多くなる。スキーヤーにとってコース整備が完全かどうかは非常に気かりなのである。加えてコース幅が5m以上と広く、必ずクラシカル走行用のトラック(カッター)を2本揃えて走らせている。

クラシカル走法は日本国内でも根強い人気があり、また初心者はクラシカルが一般的だからカッタートラックの必要性は高い。それを満たしている大滝村の常設スキー場や大会コースは少数派にも配慮したコースづくりとして定評がある。

第三は休憩所「キートスマヤ」の存在と「夜間照明施設」の完備だ。

キートスマヤは194.4平方メートルと、さして広くはないが昼食など可能な休憩施設である。そこには一気に4セットのスキーを扱えるワッ

クスルーム、更衣室、身障者が利用できる暖房シャワレット付きトイレ、一般の人々が利用できる給湯室、さらに若干のワックスやリムバー、アイロンも用意されている。利用者の自主性を重んじ、快適にスキーを楽しむための心配りが働いている。

2004（平成16）年の手作り300万円の簡易夜間照明を設置したが、2005（平成17）年には北海道地域振興補助金5000万円を得て本格的な夜間照明工事をおこなった。北海道にはどこにも見られないナイター設備を伴う3km常設コースが完成した。

これはスチッグ・ヘグブロムの悲願でもあり、関係者の強い要請もあった。福岡県や東京都から合宿に入る選手層からも待ち望まれていたことが実現したのである。

第四に、常設コースや大会の特設コース選定に伴う北海道土木現業所との交渉や私有の畑地利用で関係機関や地域住民の協力が得られたことである。コース選定に北欧的な発想を導入しメルヘンの世界を走る光景をイメージして計画づくりしたのは藤田隆明らである。

例えば、フィンランドア・ヒーヒト75mはシベリウス生誕の街ハメニンリンナから巨大な氷河でできたカツマヤルビ湖上を走り、たまに牧草やトウモロコシの切り株が残る畑地を抜け、森林のなかや農家の納屋のなかを通り、川辺を走りまた湖畔に出る。冬の日、雪と氷の湖畔のサウナで過ごす人々が裸で応援する。ゴールはハメニンリンナから75km東のラファティである。最終の5kmはナイターコースが整備されている。藤田隆明はこのコースを完走して童話の世界、ヤン・シベリウスの世界、カレワラの世界を、大滝村に実現すべく夢を持ち続けたのである。

3. 大会参加者最高の1196人に（第15回おおたき国際スキーマラソン大会）

「第15回おおたき国際スキーマラソン大会」は2005（平成17）年2月6日（日）に行われた。2月の第一日曜日の大会設定は、ほぼ定着した。札幌国際スキーマラソンは2月11日に固定したので日程を隣接させることによって札幌大会に参加した道外あるいは海外の人々を大滝村に惹き

つけなくても例年1000人以上の参加者を確保することが可能になったのである。

大会名誉顧問の高橋はるみ北海道知事は「体力づくりとともに、爽快感、達成感、他の競技者との連帯感で充足をもたらし、生涯スポーツのあり方を追求する」といったコメントを寄せている。

15回大会参加者はフィンランド、アメリカの各8人に、イギリス、オーストラリア、カナダ、スコットランド、中国の7カ国から外国人合計31人である。

北海道外は7都府県から13人の参加にとどまった。北海道は、大滝村の178人、室蘭市の103人、登別市、伊達市が各62人、苫小牧市40人など胆振支庁管内562人である。胆振管内を除く道内13支庁は札幌市の229人、恵庭市48人、千歳市47人、岩見沢市44人、函館市33人など合計590人で胆振管内参加者に拮抗する人数を数え、参加者合計は最高の1196人になった。

これまでおおたき国際スキーマラソン大会参加者のなかに11人のワールドロペットマスター取得者がエントリーし、競技に参加している。大滝スキーマラソンを数回、10数回走り続けている人々もいる。

ワールドロペットイヤーブック（年報）によると、2005年12月31日までの日本人のマスター取得者は32人、そのうち北海道出身ないし取得時北海道に在住していた者を含めると17人が北海道出身者である。ワールドロペットは1978年から行われているから過去27年間に取得した人数だが、北海道所属者が半数以上を占める。。

おおたき国際スキーマラソン大会参加者なかのロペットマスターを取得者を年順に見ると、立花勤（北広島市）、藤本清（札幌市）、佐々木宗雄（小樽市）、石村勇雄（札幌市）、進藤賢一（札幌市）、進藤祚子（札幌市）、遊座武（諏訪市）、薩摩昇次（札幌市）、松本あい子（名寄市）、松岡貞夫（札幌市）、松田記慶（札幌市）らである。

ワールドロペットは1978年アメリカのウイスコンシン州テレマークの町で提案され、スウェーデンのウプサラ市で同年発足した「質の高い大会を通してクロスカントリースキーを普及する」ことを目的とした大会

だ。提案者はアメリカ合衆国のトニー・ワイズ。

1カ国1大会を原則に、ヨーロッパ中心にアジア、アメリカ、カナダ、オーストラリアなど14カ国で毎年大会が開かれる。各大会を時間内で完走すれば持参の「ロペットパスポート」に記録などが記入され、10大会完走で「ロペットマスター」の賞状とゴールドメダルが与えられる。ショートレースもあり、これを10カ国走れば「シルバーマスター」の賞状とシルバメダルが授与されるというものである。

最新のワールドロペット年報によると、おおたき国際スキーマラソン参加者のうち、薩摩昇次、松本あい子の両人が、シルバメダルをも取得している。

2007年のワールドロペット年報によると、「ロペットマスター」取得者の多いのは、ドイツが375人、スイスの296人、フィンランドの175人であり、全体では45カ国から参加、マスター取得者は2052人に達した。

スウェーデンのバーサ・ロペット (90km)、フィンランディア・ヒーヒト (75kmから60kmに変更された)、ノルウェーのビルクバイネル・レネット (56km)、など北欧諸国はクラシカル走法が義務付けられているが、他は概ねフリー走法でいい。大会の距離やコースなど年次によって変更がある場合もある。ワンウェイもあればラウンドウェイ・コースもある。コース作りや大会運営、前夜祭、宿舎の提供などは開催国によってかなり異なる。それぞれが個性と能力を発揮し、参加者へのホスピタリティを怠らない。

日本では札幌国際スキーマラソン大会(50kmと25km)がワールドロペットレースになっている。

おおたき国際スキーマラソン大会参加者のなかにはワールドロペットフィンランド大会から始めた人も何人か存在する。

それはノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻がフィンランドのレースに細かい指示を与え、エントリーや宿泊についてもサポートをしたからである。

例えば、日本人をフィンランドの選手遠征団に加え、船とバスでスウェーデンに渡り、ヴァーサロペットに参加、フィンランドに帰国する

往復の格安ツアーに参加させるなど手の混んだサービスを行い、また、おおたき国際スキーマラソン大会にやってくる日本人にもワールドロペットへの勧誘をしてきた。

フィンランドからおおたき国際スキーマラソン大会に参加した人々の中にはロペットマスター取得者が多く、メダルやロペットパスポートを持参して大会への参加を奨励していたのだ。

ワールドロペット大会を初めて知る日本人にとってはこうして世界のスキー大会を転戦する意味やすばらしさをフィンランド人のノリコとスチッグ・ヘグブロムやその子供たちセバスチアンやヨーランから学び取った事例が少なくない。

おおたき国際スキーマラソン大会にかかわる人々のなかにはロペットマスター取得の条件10カ国を完走しなくても、数カ国を完走するか、未完走であってもスキーで走った経験をもつ人々がいる。

藤田隆明や福祉久美子、井幡篤憲らがそうである。

クロスカントリースキー大会の運営状況や参加者の楽しみ方が国々によって大きく違い、ボランティアや応援団、観客の熱意やサポート態勢が伝わってくるものだ。

フィンランド北部のラップランド、ここは北極圏に属する地域であるがクロスカントリースキーヤーとトナカイ遊牧が共に見られる地方だ。その小さな集落であるキッテラやムオニヨのオロスなどの「ラップニア・スキーウイーク」も見ることによっておおたき国際スキーマラソン大会に参考になる事項がある。

ノリコ&スチッグ夫妻は藤田隆明らにラップランドのスキー大会に参加するよう指示を出している。

さらに、この2人が仕事上居住するボストンでも、藤田に対して圧倒的にボランティア組織が運営にかかわっている「ボストンマラソン42.195km」がある。スチッグ・ヘグブロム夫妻は、藤田に自らこの大会に参加して大会運営の実際の側面を観察し、おおたき国際スキーマラソン大会の設定と運営に役立てるよう指導した。

大滝村のスキー大会はこうした国際交流のなかでスポーツ大会のあり

方を学び組み立てられてきたことで大会の運営や評価を高いものにして
いることは間違いない。

4. パラリンピック選手が参加（第16回おおたき国際スキーマラソン 大会）

寒冷な気候で多雪、暖房器具が必要な期間が半年にも及ぶ北海道。こ
の亜寒帯に住む人々が、寒い冬を耐えて春を待つのではなく、雪と氷を
取り込んで自然を楽しみ、冬が来るのが待ち遠しい、春になるのが惜し
い、そんな冬の生活に対するプラス思考を人生のなかに見つけない、と
して始められたおおたき国際スキーマラソン大会が第16回目を迎えたの
は2006（平成18）年2月5日（日）であった。

フィンランドのノリコ&スチッグ・ヘグブロムが提唱し、館林村長や
片川善明、藤田隆明職員の役場関係者が試行錯誤を繰り返しながら、参
加者を増やせこそしても減らすことはないマラソン大会に発展させた。
それも16回目になった。

大会運営の成功には、いろんな分野の人々の協力が欠かせない。人の
つながりを大切にして人の差し出す善意と好意、協力とサポートがなけ
れば大会は成功に向かわない。

北海道フィンランド協会副会長の井口光男はフィンランド関係者を大
会に導き、大会への参加を欠かさなかった。同じ協会理事で札幌スキー
連盟の井幡篤憲はスキー選手の経験を生かし、スキーコースの設計やク
ロカンスキーの技術指導にも加わってこの大会を盛り上げた。

「FIN SKI 50K」の酒井恵真札幌学院大教授や事務局長の福士久美子も
フィンランド関係者、フィンランド在住の人々を大滝村に招待し、おお
たき国際スキーマラソン大会の振興に尽力してきた。ワックスメーカー
のスウィックススポーツジャパン（高良英人社長）やスキー用品販売店
（石崎政憲社長）らがスキー用具の提供やワックスワークの指導で便宜
を図ってくれた。北海道新聞社（菊池郁夫社長）、道新スポーツ（鎌形
敏雄社長）、北海道文化放送（上澤孝二社長）、FM北海道（山本研一社
長）などマスコミ関連の社長以下関係者は大会の取材や記事の掲載、大

会開催の放送などで大会を盛り上げたのである。

サッポロビール北海道本部長や日本航空北海道支社長らの協力も積極的だった。

おおたき国際スキーマラソン大会の前後に日程を決めて姉妹村カナダ・レークカウチン村の人々を大滝村の各民家にホームステイさせ、国際交流を楽しむ一方スキーマラソンに参加させる機会を常に作ってきたレークカウチン町長のジャック・ピクーケや大会のコースづくりに1週間北湯沢ふるさと館に寝泊りして協力した千歳の陸上自衛隊第7師団第71戦車連隊(徳田秀久連隊長)らの献身的努力も賞賛されるべきである。

大会長である渡邊實大滝村々長は、第16回大会の挨拶のなかで「クロスカントリースキー普及のため多くの方々にご支援を頂いた」と感謝しながら、参加選手をはじめ関係者に「交流の場・再開の場」として大会を盛り上げ、終了後は北湯沢温泉で心行くまで温泉につかり、心身ともにリフレッシュしてください」といった。

僅か1400人の村民で構成される大滝村が全国に健康づくりを発信していく背景は、フィンランド、カナダなど外国と深く、日常的な交流を進める中で得た自信と活力、そしてグローバルティを感じさせる。

5、大会の主催は大滝村から伊達市に（第17回おおたき国際スキーマラソン大会）

第17回「おおたき国際スキーマラソン大会」は、2007（平成19）年3月大滝村が伊達市と合併してはじめての大会となった。名称の「おおたき国際スキーマラソン」は変わらないが主催は伊達市に変わったのである。

これまで長い間、ホロホロ山荘（以前は村営ホロホロ荘、その後グリービレッジ緑館の名称で呼ばれていた）で行われてきた前夜祭は2007（平成19）年2月の17回大会から「湯元名水亭」に会場を移した。大会長は伊達市長の菊谷秀吉がつとめ、大会役員には伊達市の助役やNPO法人体育協会救急法赤十字奉仕団、青年会議所のメンバーに旧大滝村関係者が顔を揃えた。夏から準備を始めるおおたき国際スキーマラソン大会の

地域社会の活性化とスポーツ文化の振興(クロカンスキー・ノルディックウォーキングの村づくり=旧大滝村を事例に)

事務は大滝総合支所の伊達市地域振興部まちおこし課（旧大滝村役場）に置かれた。

コースづくりは、既に常設コースづくりを梅津和弘と遠藤祐二の若者2人に譲ったがベテラン山城一郎がコース主任としてコース設定や造成に当たった。

前夜祭には、おおたき国際スキーマラソン大会創設者のフィンランド人、スチッグ・ヘグブロム、ギッタ・ヨキビルタ、カーリナ・ランペニウスら3人の関係者が姿を見せ、紹介された。フィンランドから3人を招いたのはノルディック・ウォーキングの愛好者団体「FIN SKI 50K」である。

大会長の菊谷市長挨拶は、1000人以上の参加者を維持してきた大会がこれからも発展することの意義を語り、次いで壇上に立ったヘグブロム氏は創設当初の話、国際大会として成長してきた経過、これから伊達市所管になっても意義ある大会になるよう挨拶した。

大会関係者の挨拶のなかで、平成20年の第18回大会には「おおたき国際スキーマラソン大会記念誌」が刊行されるほか、このマラソンが末長く盛況であることを期待する声が多く聞かれた。

アトラクションには伊達市の中心部や大滝区の人々による「よさこいソーランの歌と踊り」が披露された。

第17回大会は2007（平成19）年2月4日（日）、小雪混じりのやや悪天候の中で行われた。参加者は総数で1134人、競技は男子が30km、15kmのスキーマラソンと8km、6km、3kmの歩くスキーの5種目、女子は15kmのスキーマラソンと男子と同様の歩くスキーの合計4種目で開催された。

30kmと15km競技は、標高差245m、最高地点は標高561mのスキー競技コースとしてはややシビアな条件がある。風向きや温度変化が厳しく、ワックスワークが難しいとされている。また、30kmは15kmコースを2度周回するから、上位の選手は15kmの比較的下位の選手のなかを潜り抜けて行く。これは下位の選手にはスキー技術や体力を比較できるチャンス

であるが、上位の選手は走路を塞がれる可能性もないわけではない。「バンフライをあげられたら走路を譲れ」と注意書きが大会プログラムに記されてある。バンフライとは追い越し予告である。

おおたき国際スキーマラソンコースは難しいがコース整備が極めていいから面白い、と他の大会を転戦しているひとびとから聞くことしばしばであった。

大会では年齢別表彰を考え30kmと15kmは男女とも60歳以上、40歳以上60歳未満、40歳未満の各3ランクを設けている。各枠での表彰が可能であるし、「道新スポーツ」など新聞発表も枠別に行われる。

参加者の最高齢は室蘭市の相馬正四氏の91歳、最も若い参加者はカナダの Seamus O Leary ちゃんと天塩町の青野桃夢ちゃんの各2歳である。幅広い年齢層が参加していることがわかる。

第17回おおたき国際スキーマラソン大会の地域別参加者は次のようになっている。海外からは中国、フィンランド、カナダ、アメリカなどで16人、道外都府県は東京都、栃木県など8地域で12人、胆振管内を除く道内は札幌市の280人、千歳市81人、岩見沢市37人、恵庭市の31人など市域24、町村域18の合計42自治体で658人だった。

一方、胆振支庁管内は、地元伊達市（大滝区を含む）174人、室蘭市105人、登別市59人、苫小牧市28人、白老町23人、洞爺湖町22人など10市町村で448人の参加者である。

特に胆振支庁管内の人々は冬季間の週末、大滝区常設スキーコースで汗をかき、キートスマヤ（無料休憩所兼ワックスルーム）で弁当を食べ、北湯沢温泉で汗を流して帰るスキーヤーが集まる地域である。

参加者総数を男女別で見ると、男性が70%の797人、女性30%の337人と男性参加者が多いことが分かる。

種目別参加状況は男子の場合30kmが17%、15kmは37%と比較的長距離のスキーマラソンに参加した人がかろうじて54%と過半に達しているが、女子は17%に過ぎず、男女合わせると初歩者向け「歩くスキー」参加者が多い特徴をもつ。

おおたき国際スキーマラソン大会から1週間遅れの2007年2月11日

(日) 行われた札幌国際スキーマラソン大会と比較してみよう。

札幌国際大会は種目は50kmと25kmが「スキーマラソン」、10km、5kmと3kmが「歩くスキー」であり、男女合わせて10種目、参加者総数はおおたき国際スキーマラソン大会の2.4倍の2674人だった。参加地域で外国籍は100人だが、オーストラリア26人、ノルウェー23人、ドイツ16人と3分の2はこの3国で占められている。オーストラリア人はニセコにアルペンスキーで訪れたものが多く、ノルウェーとドイツは10日後、札幌で行われる「世界ノルディック大会」関連の参加者だから16カ国から参加しているとはいえ、この3国以外は一桁の参加者、世界ノルディック大会がらみの今年度のみ参加者も多い。

もう1つ、札幌国際スキーマラソン大会は「ワールドロペット」14カ国の大会会場のひとつで「ロペットマスター」称号獲得などを理由で世界を転戦する人々が参加する。

ロペットマスター取得者の多い国にドイツ、フィンランド、ノルウェーなどが含まれているためである。

そうした大会の性格を反映して、札幌国際スキーマラソン大会では50kmと25kmのスキーマラソン種目に参加する選手は男子で全体の62%に当たる2060人、女子はわずか25%の148人に過ぎない。

日本人の「ロペットマスター」取得者は2007年で32人、うち女性は4人に過ぎない状況で分かるように、女性の世界14カ国転戦には多少の困難があるのかもしれない。

おおたき国際スキーマラソン大会は当初、ノリコ・スチッグ・ヘグブROM氏らの提案によって、札幌スキーマラソン大会に参加するワールドロペット関係者を大滝村に呼び、スキーと温泉で休養させ、国際交流を一層強化するために札幌国際スキーマラソン大会に繋げて企画され実施されたこともあった。しかし、選手側の事情として週末2大会を2日連続して転戦するのは無理があり、ワールドロペットと同じように中1週間を置いて実施することにした経過がある。

外国人参加者数も例年は札幌国際スキーマラソンとおおたき国際スキーマラソン大会では余り変わらない状況で来ていた年度もあった。こ

これは生前、ノリコ・ヘグブロムが大滝村と国際交流を強化することが私たちの役目であるといつて、多くのワールドロペット関係者に大滝勧誘をおこなった結果である。単に母国フィンランドのみでなく、アメリカ、スウェーデン、ノルウェー、スイスなどからもおおたき国際スキーマラソン大会参加者を呼びかけていた。

第4節 傾向的に見た国際スキーマラソン大会の特徴

通算18回を数えたおおたき国際スキーマラソン大会の参加者数や参加者出身地域などに特徴が現れている。

第1に326人のスキーヤーで始まったおおたき国際スキーマラソン大会は跛行性を含みながらも増加の一途を辿り、第8回大会（1998年）には1000人を突破、以降10年間千人の大台を切ることはない。人口1400人の集落が主催する大会に1000人以上が参加する。これは並大抵のことではない。

第2回大会（'92年）と第5回大会（'95年）は胆振地方が突出した参加者数を示しているが、これはいずれも「道民スポーツ胆振冬季大会（第6回と第9回）」と共催したため伊達市、室蘭市、登別市ら関係市町村からの動員があったからである。

このときの総参加者数は第2回大会が1回大会の2倍、第5回大会は1回大会の3倍になっている。

第2の特徴は、男性参加者数は女性参加者数の約2倍で推移していることある。男性参加者が多く、女性参加者が少ない。

これは、道内の他の大会でも共通した現象であるが、女性の冬のアウトドアに対する関心の低さ、家事や育児、日常の雑務が女性の身に降りかかっているせいもある。ただし、比較的目立つのはシニア世代の夫婦同伴参加者が彩りを添えていることである。

北欧各国やイタリア、フランスのように若い女性の参加が多い国に近づくことを期待したいものである。

第3に参加者の動向を確認してみよう。

アスリート向けに準備されている30kmレースへの参加数比率は17回大

会の平均でわずか8%である。しかし、少しずつではあるが伸びる傾向にある。30kmレース参加者は札幌など胆振管内以外の道内が80%あり、地元の人々にはやや遠い存在だ。

コースが苛酷ということ、大滝村在村者に十分アスリートが育ってるとはい、難い。

30kmは徳舜瞥山山麓の急斜面を上り下りする上級者向けコースとして設定されている上に、1度ゴールラインを通過して再度急坂を登り、山麓を2周するやや過酷なレースのイメージがぬぐい去れないから、初心者、中級者には敬遠されがちである。

15kmコースは30kmの半分(1周)でまさに中級者向け。参加者総数は17回分の総計で4000人を越え、全体の27%と、初心者の3kmコースと同じ比率だ。

半分は登り、半分は下り、フラットな面が少ないコースであり30kmを3時間40分以内フィニッシュすることが義務づけられている。大半の参加者はフリースタイル(スケーティング)走法で参加するがクラシックスタイルでのスキーヤーも見受けられる。クラシック用トラックは準備されているから問題ない。

おおたき国際スキーマラソン大会では30kmと15kmを「クロスカンリースキーの部」、8km、6km、3kmの部を「歩くスキーの部」と分けている。長距離部分の中・上級者向け、短い距離レースは初心者向けとなっている。

歩くスキー3部門(8km、6km、3km)への参加者は全体の63%と、大会の主体は歩くスキーにある。初心者を軸に組み立てられているのである。

8kmの部は第5回大会から、6kmの部は第11回大会から、3kmの部は第3回大会から、それぞれ設けられた。初心者の参加が全体の60%を越える状況からの決定であった。

6kmの部が新設されると、3kmの部から6kmないし15kmへの参加者の移行が見られる。特に大滝村ではその流れが出はじめている。少しずつ

ではあるが、歩くスキー効果が出て技術力が向上し、やや長い距離を好むようになってきているのだ。2008（平成20）年度、大滝中学校の生徒はほぼ全員が15kmに挑戦するなど学校教育のなかでスキー技術の練成が行われているのも強みである。常設コースの整備が良くなるに従って、村民の歩くスキーに対する練習量が増え、技術的にも向上しているからであろう。

第4に参加者の居住地や外国人参加者の状況はどうなっているか。

地元大滝村の参加者は'95年（第5回大会）と'98年（第8回大会）の約250人をピークに下降傾向を示す。これは村の人口減少に相応している。そして30km走者は0～2人で推移しているが、15km走者は少しずつ増加している。主体は8kmレース以下のショートコース、つまり大衆スキーヤー参加である。室蘭を含む胆振地方の参加者も増える傾向にはない。それに代わって増加しているのは札幌市を含む道内各地からの参加者である。こうしたスキーヤーはややアスリートに近く、30km、15kmのクロスカンントリー競技にエントリーし走る傾向がある。毎年のように大会参加を楽しみしている人々も少なくない。

外国からの参加者は次のような傾向だ。

'91年（第1回大会）から'98年（第8回大会）までカナダからの参加者が多い。それは姉妹村であるバンクーバー島のレークカウチン村からの相互訪問客が彩りを添えているからだ。

レークカウチン村の参加者は大滝村の各家庭がホームステイ客として受け入れた。

フィンランドは'92年（第2回大会）から'00年（第10回大会）まで二桁で推移しているのはノリコ・スチッグ・ヘグブロム夫妻の勧誘によるものであるが'01年ノリコの死去に伴いフィンランドからの参加者は一桁台に下がった。それまでフィンランド人動員にノリコの存在が影響を及ぼしていたのではないかと思われる。

フィンランドからの参加者の半数程度は第1回大会から第6回大会あたりまで北湯沢の私の山荘を合宿所にして宿泊していたが、その後は次

第にグリーンヴィレッジに泊まるようになった。

村の理解が得られ、宿泊料金が少々割引されたり、招待形式になったからである。

フィンランドの参加者は17回までの大会を通して164人で、姉妹村であるレークカウチンのあるカナダの208人に次いでいる。

外国人参加者が多かった年度は'93年（第3回大会）の64人、'95年（第5回大会）の50人、'00年（第10回大会）の47人である。

'93年と'95年はオーストラリア、ポーランド、スウェーデンなどからの参加者がいるが、これらの多くはワールドロペット札幌大会参加を機に来日し、大滝村に足を延ばした人たちで、オーストラリアのミレニフスキーのように日本人のロペットマスターが招き入れたものもいる。

'00年（第10回大会）はミレニウム記念大会で、大会本部が道内の大学、高校留学生をおおたき国際スキーマラソン大会に招待したことによる。このときは、中国人留学生を筆頭に、雪のないドミニカ共和国、エルサルバドル、メキシコなどからの参加者が含まれている。

'98年以降の10年間のおおたき国際スキーマラソン大会の参加者を年齢別年次別に見ると次のようになる。

9歳までの若年層に変化はない。10歳から40歳代までは各ディケイド（10年間隔）ですべて減少傾向、60歳、70歳、80歳はすべて増加傾向である。若者のスキー離れの進行はアルペンスキーに留まらない。そしてシニア世代のクロスカントリースキー熱が盛んなことを示している。

シニア世代は自由な時間を有し、健康づくりと精神的なリラックスを求めてクロスカントリースキー場に足を運ぶ。

クロスカントリースキーは北欧から発祥してヨーロッパ全域に、また北アメリカやオーストラリアにも波及した。日本で普及が遅れているのは指導者層が薄いためスキーの操作技術が高まらない、ワックスワークが上達しない、コースが整備されていないなどが背景にある。いまだに「汗を流すだけで面白くない」の声が強い。この問題が改善されなければスウェーデンの大衆スキー大会バーサロペット90kmレースのように5万人参加の状況にはならない。スウェーデンは人口が北海道の1.5倍

の900万人だ。

スキーヤーをして「楽に長い距離を走り、冬を満喫できる境地」になる大会に一步地近づけたのが「おおたき国際スキーマラソン大会」である。

第5節 意義と課題

1, 地域の特性を生かしささやかな国際交流のなかで生まれ育まれた大会

おおたき国際スキーマラソン大会の始まりはボストン在住のフィンランド人スチッグ・ヘグブロム夫妻の提案で始まった。国際大会の名称に恥じない行事にすることを示唆し、国内外から参加者を紹介し、コース設定に関しては国内の専門家に協力を要請したのである。ノルディックスキー競技の先進地域北欧のスポーツ文化を日本で実現しようとする点で出発点であったのは間違いない。

だが、大滝村に多くのノルディックスキーヤーが存在していたわけでも、周辺地域がこうしたスキーのメッカであったわけでもなかった。クロスカントリースキー競技会運営を経験したひとすらいなかったのである。

当初スチッグ・ヘグブロムの提案に村やスポーツ団体も躊躇したのは無理もない。スチッグの情熱は理解できても受け皿がない。そんななかでもフィンランド人と大滝村職員の信頼関係は接触するたび色濃く醸成され、強い絆で結ばれるようになった。この仲間意識と信頼関係が村側に第一回スキーマラソン大会開催を決意させた。最初は手作りの素人仕立ての大会だった。村の体育協会のなかにある陸上競技協会のマラソン大会方式でスキー大会を実施するのがやっとなのである。当初から試行錯誤の連続だった。コースづくりはスノーモービルのための圧雪で始めた。第二回大会からは陸上自衛隊第71戦車大隊にコースづくり支援を要請し、協力を仰いでいる。雪上車2台で対応してくれたが自衛隊もコースづくりにノウハウがあったわけではなかったし、雪上車はスキーコースづくりの圧雪機能を有していないから、スキーコースはフラットに仕上がる

ものではない。村内在住者で陸上競技の計時審判経験者を発掘したことで、スキー大会時は近隣市町村の時間計測専門家の協力支援が可能になる。

参加者の安全と健康確保も重要な課題である。

大滝村救急法赤十字奉仕団を窓口にも、千歳、苫小牧、室蘭、登別市のスキーパトロール支援も得られ、大会が地域を横に結びつける役割を果たし始めた。

第四回大会からは大衆クロスカントリースキー競技会としてSAJ（全日本スキー連盟）公認大会として開催される。つまり常設コースがSAJの公認に耐える一流の技術によって造成されるようになったのである。

第三回大会から第五回大会までのコースづくりは他企業のアルペンスキー場から圧雪車を借用して行い、コースを整備した。遠くは函館方面から借用したこともあった。

こうした努力の結果、参加者から「コースは良い」との評価を受け、村は1995（平成7）年と1996（平成8）年の2カ年計画で圧雪車の購入とスキー客の休憩施設「キートスマヤ」の建設をおこなったのである。これらは「雪体験歩くスキーツアーコース」の広域圏補助事業を財源としている。

「キートスマヤ」とは、フィンランド語で「ありがとう」の意味である。

この休憩施設にはチェーンナップ台4台のワックス調整器具、ベビーベッド、ウォッシュレット付きで勿論、暖房が完備したトイレ、持参した食事など食べられるテーブルも備えている。

第五回大会からは北海道新聞社などマスコミ関係機関が主催者に加わり、大会の様子が全道的に告知、広報された。おおたき国際スキーマラソン大会が広く道内に知れ渡ったのである。参加者は大滝村及びその周辺から全道に広がりを見せたのである。

第8回大会からは、スキーを国際的に支援するクラブ組織として大滝村に「FIN SKI 50K」が民間レベルで組織され活動を開始した。

小さな村での国際大会運営の弱点は、大会役員に借り出される青年、壮年の村人が多ければ、村人のスキー大会参加者が減少するというジレ

ンマである。出来るだけ大会競技参加者を優先しても大会役員は100名以上が必要だ。

大会を支える実行委員やボランティアの人々が大会を盛り上げる大きな力になってきた。

寒い外気のなかで大会を影から支える村民が情熱と魂を注がない限り、すばらしい大会にはならない。

村が600万円以上の大会経費を持ち出し、経営・運営費として損はあっても収入に結びつかない大会を盛り上げ成功させるためには、大滝村の人々の誠意やホスピタリティがあってこそできるものである。

競技に参加する人々がもっともサービスとして要求するのはコース整備である。一定の幅があり、硬く圧雪されていて、クラシカル走法用の溝（トラックカッター）が敷かれ、安心して大会を楽しめることである。

大会の運営や日常的にスキー練習の出来る常設コースの設定には一定のノウハウが必要だ。

常設コースが整備されると、村民や近隣自治体のスキーヤーがクロスカントリースキーを楽しむようになる。大会を盛り上げる原因になっていくのである。

日常生活のなかにスキーが定着し、スポーツ文化が開花していく。常設コースとキートスマヤは週末や祭日、室蘭市、伊達市(旧)、千歳市、苫小牧市など周辺地域からのクロスカントリースキーヤーで賑わう。大滝でスキーをして汗を流し、直売所で美味しい野菜など買う。北湯沢温泉を楽しんで岐路に着く。こうした話題が聞かれる。それに、冬季間行われる道内各地のクロスカントリースキー大会の情報交換が日常적으로こなわれている。

クロスカントリースキーのジョイント効果であるといっている。

とりわけ汗をかいた後の日帰り温泉に人気が集まっているようだ。

大滝村は、1992（平成4）年3月から1ヶ月間、大会事務局員を北欧の視察研修に派遣している。

フィンランドで対応したのは「おおたき国際スキーマラソン大会」創設者のスチッグ・ヘグブロム達であった。

大滝村の役場職員藤田隆明は、世界を代表するクロスカントリースキー大会「ワールドロペット」のフィンランド大会75km、スウェーデン大会90km、ノルウェー大会65kmをそれぞれ走破して大会運営の方法やコースづくりのノウハウを身につけたのである。藤田はその後、おおたき国際スキーマラソン大会を牽引する役割を果たす。

1996（平成8）年には村、議会、教育委員会、大会事務局関係者4人が北欧の視察研修に臨み、やはり、ヘグブロム夫妻等が詳細に案内をしていたのである。

他方では、フィンランド代表としてリレハンメルオリンピックに出場したトピ・サルパランタを1カ年と2ヶ月（冬季2シーズン）大滝村に招聘し、クロスカントリースキーや夏のポール・ウォーキングの指導も依頼している。トピ・サルパランタは今日、日本の複合競技選手でワールドカップ2勝している高橋大斗のコーチを務めている。

おおたき国際スキーマラソン大会には、さらに大きな特徴がある。大滝村は障害者福祉のむらとして多くの障害者施設を誘致し、村全体が障害者と連携した行事を、企画運営してきている。北湯沢小学校があったころの運動会は、北湯沢リハビリセンターの入院患者と合同で行い、地域の子供達は小さいころから障害者と親しむことを心掛けてきた。

おおたき国際スキーマラソン大会のコースは重度身体障害者施設「大滝わらしべ園」の敷地の一部を通過するように設定されていることもあり、施設側から入所者の大会参加の要請があったので大会関係の体育指導員の間で検討会が持たれた。

当時は、今日のようなアルミフレームの身体障害者用シットスキーはなかったから、アルペンスキーに手作りの椅子を取り付けた簡便なもので参加してもらうことにした。今日まで身障者が列をつくり参加するようになった基礎は手作りスキーにあったのである。

こうしておおたき国際スキーマラソン大会と常設コース設定は地域的活性化の運動として大きな意味を持ったのである。

おおたき国際スキーマラソン大会とそれを支える常設コースが小さな

村の人々に冬の健康を約束し、とかく家に籠もりがちな雪の季節に新しいコミュニケーションの場と豊かなスポーツ文化を育んでいることに大きな意義がある。

課題は、おおたき国際スキーマラソン大会は、これまで小さな村が運営する国際大会として多少出費が増大していて贅沢だ、といわれたかもしれない。伊達市に編入し予算削減と規制強化が大会の性格を蝕んでいくことが強く憂慮される。

第6節 おおたき国際スキーマラソン大会貢献3人衆

おおたき国際スキーマラソン大会提案者ノリコ&スチッグ・ヘグブロム

おおたき国際スキーマラソン大会提唱者のスチッグ・ヘグブロムは1926（昭和元）年フィンランドの東部にあるコトカ市に生まれた。コトカ市は首都ヘルシンキの東約120kmのフィンランド湾に面した街で、ロシア国境まで23kmの地点。1950（昭和25）年、ヘルシンキ大学体育学部卒業した。

卒業後はフィンランドの新聞 *Hufvudstadsbladet* の運動部記者となり、運動部長及びコメンテーターを27年間勤めた。その後フリー記者となり世界の新聞、雑誌に記事や評論を提供している。

スチッグ・ヘグブロムは国際的なスポーツジャーナリストとして知られているが、特にウインタースポーツ、冬季・夏季のオリンピックや世界選手権、ヨーロッパ選手権、ワールドカップなどを取材の対象としている。

1972（昭和47）年の札幌冬季オリンピックでは真駒内のプレスクラブで取材をし、本国に記事を発信していた。この年、ボストン在住の大島則子と知り合い結婚する。大島は札幌出身、札幌南高校卒業後フルブライト留学生としてアメリカに学び、ハーバード大学などを経てボストンで旅行会社を立ち上げた。

大島則子の妹は酒井玲子北星学園大学教授、夫の酒井恵真は札幌学院大学教授で旧大滝村に事務局をもつスキークラブ「FIN SKI 50 K」のオー

ナーである。

1990（平成2）年2月、ノリコ・スチッグ・ヘグブロム夫妻は大滝村役場を表敬訪問し、その夜の歓迎パーティーでスキーマラソン（クロスカントリースキー）の環境整備を提案した。そのためクロスカントリースキー先進地の北欧を視察するよう役場関係者を説得するため、この年の10月再び夫妻は大滝村を訪問する。

役場側は1991（平成3）年度予算編成会議の折、翌年（平成4）の第1回おおたき国際スキーマラソン大会を実施することを決定した。

ノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻はフィンランドからもスキーマラソン選手を参加させることを確約、以後役場職員の藤田隆明をはじめ館林村長等関係者をフィンランドなど北欧各地に招待し、案内を買って出た。

スチッグ・ヘグブロムはフィンランドに在住する兄弟、姉妹、自分の子供も動員して大滝村関係者の案内や接待（パーティー）を展開し、宿泊の便宜をはかり、大会参加者にはエントリー席まで付き添って誘導した。誰もがこうした歓待に度肝抜かれた。

ノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻は、選手権やオリンピックのような競技スキーにも強い関心を寄せていたが、ボストンマラソンやワールドロペットスキーレースのような大衆参加型の大会に深い理解と興味を抱いていた。

毎年2月の第2日曜日に開催される札幌国際スキーマラソン大会は世界14カ国で行われるワールドロペットレースの1つであり、ノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻はこの大会に出場するフィンランド選手団とたびたび札幌を訪れていた。

従って、フィンランド人でおおたき国際スキーマラソン大会に参加する人々は、大滝大会が終わると札幌国際スキーマラソン大会で出走する人々の比率が高かったのである。

スチッグ・ヘグブロムは1964年から国際スポーツジャーナリスト協会

副代表（副総裁）で、1974年には同会の名誉会員に推薦された。最新ではフィンランド文化省からプロスポーツ栄誉賞（金メダル）を、またフィンランドオリンピック委員会から100年記念祭（2007年）で金メダル授与されている。

著書は Vär idrott(Our Sport)year Book1951~1958,MelbourneOlympiad en1956, Idrottsboken-/Urheiluvuosi(Sport-year)1958~67, European Championship in Helsinki 1971,Sarajevo1984(Official Olympic Book in 7 Languages), Own Memoirs:Paavo Nurmi, Viljo Heino och Urho Kekkonen(In Swedish 1998,InFinnish 1999) など。

フィンランド大統領 Urho Kekkonen に接見、対談に臨み、またオリンピック史上初、9個の金メダルを取得したフィンランドの陸上競技王 Paavo Nurmi の伝記など著している。

スチッグ・ヘグブロム（Stig Höggblom）は世界を舞台にして精力的に活躍し続けたスポーツジャーナリストであり、多くの国の言語を駆使し、常にスポーツの最前線で取材し、新聞、雑誌、著書を通じて記事を世界に配信してきた。活動舞台は主にフィンランドのヘルシンキとアメリカ合衆国のボストンだった。

スチッグ（Stig）の2人の息子 Sebastian と Göran は若いころ日本で1カ年学んだ経験があるから、日本語も喋り、日本文化も理解している。現在、Sebastian はフィンランド語学学校校長であり、Göran は身体運動療法士をしている。妻ノリコは北海道生まれの大島則子だったが2005年アメリカ合衆国で死去した。

何故、おおたき国際スキーマラソン大会をはじめ、クロスカン트리スキーに力を注ぐのか訊ねたことがある。

スチッグ・ヘグブロムは「クロスカントリスキーをもっと理解して欲しい。もっと盛んにしたい。積雪量は北欧や北アメリカの比ではない。日本人に雪の有難さを知って欲しい。」ノリコは「私は若い頃日本を飛び出した。北海道に恩返しをしたい。ただそれだけです」と応えた。

ノリコが死去してからスチッグ・ヘグブロムが大滝村を訪問する機会は少なくなった。

しかし、スチッグ・ヘグブロムは第1回おおたき国際スキーマラソン大会以来、大会名誉顧問として大会プログラムの巻頭にその名がある。

2007(平成19)年2月、おおたき国際スキーマラソン大会第17回大会に招待されたスチッグ・ヘグブロムは妹のエルギッタ・ヨキビルタと友人のカーリナ・ランペリウスらとともに大会に姿を見せた。80歳の大台は超えていたが元気だった。

私の北湯沢山荘(仙流荘)で前館林村長、前間野村会議長等関係者が集まった歓迎パーティー(2007.2.1)でスチッグ・ヘグブロムが挨拶した。「19年前、この家でおおたき国際スキーマラソン大会ははじまった。全てこの家から発信し、実現に向った。小さな国際交流が、大きな成果を生み出した」と往時を偲び胸を張った。

私は、1978年2月アメリカ合衆国ウイソコンシン州テレマークでトニー・ワイズらによって発足したクロスカントリースキーの国際大会「ワールドロペット」の誕生を重ねた挨拶だと思って感動した。

ワールドロペットは、いまや毎年14カ国で開催され、ロペットパスポートを持参しているひと9000人、ロペットマスターの称号を獲得したひと2000人(日本人は32人)に達し、ロペット大会への参加者は毎年10万人に近い。

おおたき国際スキーマラソン大会の立役者 藤田隆明

おおたき国際スキーマラソン大会の提案者はフィンランド人のスチッグ・ヘグブロムであったが、その提案を实践した立役者は大滝村役場職員の藤田隆明である。藤田がスチッグ・ヘグブロムに出会ったのは1989(平成1)年、夏で北湯沢の私の山荘であった。

スチッグ・ヘグブロム夫妻がはじめて大滝村役場を表敬訪問した夜、山荘でささやかな歓迎会が行われ、そこには館林俊圀村長、片川善明総務部長らの役場関係者が同席した。

そのときの様子を藤田は北海道フィンランド協会誌「AURORA」9号(1997年12月25日発行)に次のような文章で寄せている。

「北欧にはいたるところにクロスカントリースキーコースがあり、冬

を誰もが気楽に楽しみ健康づくりに役立てているのに、日本ではそうした施設がないので是非紹介したいといい、大滝村理事者にクロスカントリースキーパラダイス構想が、ノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻から提案された」。

藤田はもともと小樽にあったアジアスキーKKに勤めたり、新潟県の有沢製作所にスキー製作技術の研修に1ヵ年出かけた経験があり、スキーには明るかったが、このパラダイス構想には目を見張った。

藤田の行動力と情熱を信じた館林村長ら役場の首脳部も積極的に藤田を支援し、海外のスキーマラソン大会の視察や研修に派遣した。

北欧のフィンランドやスウェーデン、ノルウェーのスキーマラソン視察、アメリカ合衆国のボストンマラソン視察にはノリコ&スチッグ・ヘグブロムが真剣に乗り出して支援し、先導したのである。この人間関係がおおたき国際スキーマラソン大会及び大滝村にクロスカントリースキー常設コースをつくり、休憩施設「キートスマヤ」を建築、コースに夜間照明を灯し、圧雪車を購入して現在の環境を形作った全ての原型になっている。

「1992（平成4）年2月17日から3月18日までの約1ヶ月間、館林俊園大滝村々長は当時教育委員会職員藤田隆明に北欧スキー事情研修のための出張を命じた。

藤田はこのヨーロッパ研修中に「ワールドロペット大会」のうち、フィンランドの「フィンランディア・ヒーヒト75km」（ハーメンリンナからラファティまで、参加者約1万人）、スウェーデンの「バーサロペット90km」（セーレンからモウラまで、1日の参加者約1.8万人、バーサロペット週間の3大会合計参加者は約5万人に達することもある）、ノルウェーの「ビルクバイネルレネット55km、」（レーナからリレハンメルまで、参加者約7000人）を走破し、スキーヤーの眼でコース造成や大会運営、前夜祭の概要や宿泊施設、クラブ組織や小さな村々でのスキー振興状況を詳しく視察した。

大会前にはコースのインスペクションを念入りに行うこと、圧雪機械によるコースの整備方法、救護所の配置と救護の仕方、大会運営の準備

状況、計時・記録など運営方法、地元スキークラブとの交流、テレマークスキーの研修などをおこなっている。

藤田はこの視察の最中、ノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻の案内でフィンランド各地のクロスカントリースキー場など見たほか、スキー用具やワックステクニク、夜間照明施設、スタートハウスやゴールハウスなどのスキーヤー休憩施設、大会コース上の簡易トイレ設置、圧雪車などをつぶさに見学した。

藤田が感動したのは、コース幅が広く(5~10m)、夜間照明が装備された常設コースで車道との交差はスキー専用の橋梁や覆道で完備し、常設化していることであった。

コースの沿って、住民が週末利用するコテージやサウナ、スポーツ宿泊施設などが森に隠れるように林立していることに感動して帰国した。

「バーサロペット」や「フィンランディア・ヒーヒト」などはレースが夜間にずれ込むため照明施設が5kmにも及んでいること、ノルウェー全体で照明付きコースが120km、照明のないコースも含めると500kmに達していることを実際の眼で確かめた。

ヘグブロム夫妻は、藤田隆明にクロスカントリースキーの先進地、北欧のスキー場を案内しながら、大滝村でのスキー大会開催には先進的ノウハウを取り入れ、大会コースや日常コースづくりに励むよう細かく指示を出したのである。

藤田は「1990年、北湯沢温泉の私の山荘でノリコ&スチッグ・ヘグブロム夫妻から大滝村にクロスカントリースキーのパーマネントコースを作ってくださいとの話があり、そのときフィンランドのスキー施設を見に来るように勧められたのが、その話は村長等の協力により3年後に実現した」という。

そして、藤田がフィンランドに到着すると、“夫妻は空港に駆けつけ、「フィンランディア・ヒーヒト75km」大会参加に際してヘグブロム夫妻はスキー板、ワックスワーク、コースガイド、レース中の誘導、食事や宿舎の手配まで細かく指示し、献身的に対応してくれた”と、復命書に書き記している。

藤田は「北海道の長い厳しい冬を克服し、楽しく健康的に暮らすために歩くスキーの普及が、今後の道民にとっての有効な手段であることを確信できた。北方圏に暮らす人々との交流を通して地球的人間愛を感じることもできた」と述べている。

この実践的研修の成果をもとに、藤田は以後、「おおたき国際スキーマラソン大会」運営や会場作りの中心的人物になって行くのである。

他方、同年6月、フィンランド独立75周年親善使節団として館林俊圀村長と間野重徳村議会議長もフィンランドを訪れ、スチッグ・ヘグブロムの紹介でムーミン村を訪れたが、ムーミン童話の作家トーベ・ヤンソンは不在で、彼女に会うことが出来なかった。

ヘグブロム夫妻は館林村長、間野村議会議長両氏を2006年冬季オリンピック立候補予定のラハティやスキーリゾート地ハミナの施設に案内し、フィンランドのスキー事情を詳しく説明している。

ラハティはヘルシンキの北東、車で1時間程度の湖畔の街、ジャンプ台や屋内外競技場のほかホテル、クロスカントリースキーコースの出发点、ゴール地点に位置するスポーツの街だ。競技場内にあるスポーツ博物館にはスキージャンプやバイアスロン射撃のシミュレーション装置が完備し、一般の人々がジャンプや射撃の擬似訓練ができる近代的施設設備が整っていた。ラハティは2006年冬のオリンピックに立候補し、フィンランドをあげて誘致運動を展開したがイタリアのトリノに破れ、その後オリンピック招致に名前が挙がっていない。

こうした村ぐるみの海外出張はスキーマラソン大会開催とそのグレードアップに大きく役立っている。

クロスカントリースキーコースづくりに献身した山城一郎

1, 世界ノルディック出場選手の練習舞台になったおおたき常設コース (2007)

「世界ノルディック札幌'07」に出走を予定していた距離選手が事前練習のため伊達市大滝区クロスカントリースキーコースを選び、'07年2月5日から一斉にトレーニングを開始した。

'07年2月17日(土曜日)の「北海道新聞」は理由として「コースの良さ」と「会場の札幌に近い」ことを挙げている。

新千歳空港からのアクセスの良さ、積雪量が2月16日現在で145cmと多く、北湯沢温泉がコースに隣接しているなどの条件も挙げた。

ヨーロッパのスキー場はこの年積雪に恵まれず練習不足のまま、札幌入りしたアスリートも少なくなかったのである。

カザフスタンチーム10人を皮切りに、オーストリア、ドイツ、日本、ノルウェーなど8カ国、1日最大125人、延べ1200人が練習に励んだ。期間は6日間から最大はノルウェーの17日間に及んだ。

北湯沢温泉の宿泊状況から延べ数を見ると、ノルウェー(429人)、チェコ(189人)、オーストリア(140人)、ベラルーシ(119人)、ウクライナ(84人)、ドイツ(30人)、カザフスタン、ロシア、アメリカ、ポーランドなどであった。

練習している選手の声は、一様にコース取りや圧雪状況、クラシカル用カッターの入れ具合の高度なコースづくり技術に感動していた。

北海道新聞は、チェコの女子選手で始めてワールドカップ優勝を飾ったユスチナ・コワルチクの談話として「適度にきついコースがあって、コンディションを上げていくのによい」と評価、日本の岡本英男ヘッドコーチの談話は「平坦な部分も多いのでゆっくり調整することができる」と高い評価を下している。

大滝クロスカントリーコースは平成8年大川監督率いる青森県女子チーム(通称弘果)、ソルトレークオリンピック代表の工藤博選手ら同和興行チームや福岡県・熊本県・九州大学の西日本スキー連盟チームなど実業団や学生チームが毎年合宿に訪れる。期間は正月を挟んで1週間から10日間程度であり、一度体験すると毎年おおたき国際スキーマラソンの常設コースを選ぶひとびとが多い。日本のトップ選手であるNTT東日本の今井博幸、東京美装の岡本英男、トリノ・ソルトレークオリンピック代表の福田修子らも含めてコース取り、コース整備の技術力に対する評価は高い。トップアスリートが見て評価が高いのはコースづくり

を担当している山城氏がもともとクロスカントリースキー選手であったからではない。コースづくりに対する研究心と強い情熱に支えられ、地域の活性化に取り組もうとする真摯な心構えによるものである。日本スキー連盟公認の8kmコースにおまけ2kmコースも含め、全てのコースにクラシカル用カッター（溝）がつけられている。夜もナイター照明付きでオープンしているし、スキーヤーは夜間照明施設の点灯の下3kmの常設コースで練習できるのである。

もう1つ特徴的なことはシーズンインが早いことである。少なくとも12月中旬オープンし、3月末から4月上旬までスキー場を整備する。シーズンインが早いのは積雪量も関係するがスキーヤーにとっては頼もしいことだ。札幌市内の各スキー場は年末ぎりぎりか、新年になってからのオープンのところが多い。

加えて、休憩室に4台分のワックス装置がありアイロンなども備え付けられていることだ。

ちなみに札幌では比較的規模の大きい「白旗山スキーコース」や「滝野スキーコース」は1月と年末のオープンでナイター施設は勿論ない。また暖房つきワックスルームなどの施設も簡易なものだ。滝野コースは16kmの常設コースのなかの半分程度しかクラシカル用カッターははいていないのである。

2. 情熱男山城一郎の奮闘

第3回おおたきスキーマラソン開催と常設スキーコースが出来て以来、一貫してコース整備を担当してきた山城一郎抜きの絶妙なコースづくりは考えられない。

山城は四国愛媛県出身である。北大で数学を学んだが中途退学し、大滝村在住の北大理学部水谷教授のもとで家畜の共同飼育を行い、伊達市シュナーダー学園、蘭越塾教師などの職業を経験した。

大滝村に移り住んだのは1979（昭和54）年。間もなく大滝村役場教育委員会の囑託となり、スキーコースづくりに専念する。

第一回、第二回おおたき国際スキーマラソン大会はスノーモービルを

利用したり、北湯沢スキー場（現在は閉鎖）や函館仁山スキー場の圧雪車を借用したこともあった。

SAJ（全日本スキー連盟）公認コースが出来てから山城氏は、単に規格に合ったコースづくりだけでなく、コースの状況に応じてレイアウトし、美しいコースづくり、安全なコースづくりを心がけている。連盟規定ではコース幅は最低6m、コース端から95cm離してクラシカル用カッターを入れなければならない。これも根気との闘いだ。

圧雪車は2台あるが大幅が5.2m、小幅は3.2mでいずれも6m以上のコースを1回で圧雪することは不可能である。

クロスカンリースキーコースづくりはアルペンスキーコースより困難が伴う。コース幅の確認、微細なアップダウン、カーブのコース斜度など複雑だ。

コース整備には時間的制約がある。

1回圧雪すると仮定すれば、1コース2回、合計20kmしなければならない。3cmの新雪があれば、普通3.5時間で済むが、積雪の状況が悪ければ4.5～5時間を見なければならない。

早朝9時に圧雪完了するためには早朝4時から機械を動かさなければならないのだ。

日中も雪が降り続けば、2回ないし3回まわることもある。

選手の合宿などがありナイター利用があれば、それもやらざるをえない。勘弁して欲しいと思うこともある、と山城はいう。

「常設コース」の圧雪と「おおたき国際スキーマラソン大会」の圧雪は異なる。大会ではどこから回り始めるか、雪が降り続く場合はどうするか、常に神経を使う。フリーとクラシカルの参加者数の状況によっても臨機応変に対応しなければならない。

自衛隊の応援は依頼しているが、圧雪はしない。通信、救護、誘導（チェックポイント）施設設営が彼等の仕事だ。

おおたき国際スキーマラソン大会はスタートから80mに12列のクラシカル用カッターを入れ、フィニッシュラインにRCチップを埋め込む。

どのスキーヤーも80mはクラシカル走法で走らなければならない。こ

のコースづくりを平行にしていくことは最も熟練の要する仕事である。4 mに3列、8 mに6列、また4 mに3列をカッティングしていくのだ。

トリノオリンピックに出場した今井博幸選手や札幌のノルディック世界選手権で夏見円選手と組んで出場した福田修子（ノブコ）選手は、おたきのコースづくりに驚嘆している。

コースづくりに対して山城氏に知恵を与えたひとには全日本選手権を制した渋谷洋子選手らの助言やコース設定に携わった藤田隆明氏の指導もあるが、何といても山城氏の研究心、コースづくりにかける情熱、どんな条件下でも圧雪を継続する忍耐力によって、国際的に優れたコースとして評価されているのだ。

おたき国際スキーマラソンのチップ計測はヨーロッパから持ち込まれたものであるがこうした大衆的な大会での利用は第6回大会(1997年)からで日本初であった。

チップ計測は競技参加者がチップを足首に巻きつけスタートすれば、7km、15km、22km、30kmで途中経過ラップおよびフィニッシュ計測が自動的にできるものである。その結果は紙に印刷され、各参加者に配布される。

こうした計測方式は北欧などでかなり前から行われていた。

山城一郎は2005年シーズンで大滝村教育委員会嘱託を辞してコースづくりの一線を退いた。2006年度からは伊達市のNPO法人「大滝まちづくり観光協会」にコース管理が委託されたのである。新たに大滝村出身の若手の梅津和弘、遠藤祐二の両氏が圧雪コースづくりの業務を引き継いでいる。

3. コース設計の特徴と施設

大滝村のクロスカントリー常設コースの設計は1993（平成5）年から'95（平成7）年の仮コース3km造成に始まる。国有地の河川敷が50%、民有地の地権者は農家3戸（西田家、工藤家、小田切家）とわらしべ学園から借用し、国有林内の旧道や碎石道や農地などを利用した。河川敷は出来るだけ木を切らないように木の少ないところを選び、小川

や溝は手作業で土管を入れ、橋下などの石盛りを行った。長流川が比較的急流であり河川敷がえぐりとられることもしばしば起こっている。その度に、石材は多少遠いところからも運び込んでコースを補修している。

常設コースを5kmにしたところで全日本選手権が開催できるSAJ(日本スキー連盟)公認のカテゴリーAランクコースの認可を受け、さらに民有地(高橋家)にコースを延長、8kmとした。

河川敷は崩れやすく補修の必要性に悩まされた。河川敷が部分的に使えなくなると民有地に頼らざるを得ない。8kmにプラス2kmコースを造り、おまけコースとしたが、この特設コースは急斜面にあり、国内外の一流選手の格好の練習場になっている。

'00(平成12)年に来日したフィンランド・ナショナルチームのペッカ・ヴァファリンスキーは「コース取り、アップダウンの状況などナショナルチームの選手が使っても文句なしだ」と絶賛した。

1996(平成8)年圧雪車を購入し、オペレーターの山城一郎が中心に冬季のコースづくりに専念した。コース造成で注意を払ったのはカーブの斜度や取り方、トラックの入れ方である。この微妙な手加減がコースの出来に大きくものを言う。

翌1997(平成9)年には脱衣所、トイレ、ワックスルーム、休憩室を備えたキートスマヤを建設、スキーヤーが自由に利用できるようにした。

キートスマヤの建設は前年5月、藤田隆明らが研修したボストンマラソンや役場職員ら4人が来たフィンランドのムオニヨ(オロス)やロバニエミの休憩施設が参考にされた。キートスマヤは大滝中学校に隣接して建てられているので中学生のワックスワークにも役立っている。

第7節 大滝村で始まったノルディック・ウォーキング

1, 「ノルディック・ウォーキング」は誰でも、何処でもできる有酸素運動

近年、若者から中高年齢層まで健康維持や自然とふれあう爽快感を求めてジョギングやウォーキングが盛んになってきている。これは日本だけの傾向ではなく欧米先進国ではごく当たり前に見られる現象だ。日常

ジョギングやウォーキングを楽しむ人々は街の公園や川沿いの遊歩道、春夏秋冬の山野に繰り出し、体を調整してから大衆マラソン大会や山岳登山に向かう人々も珍しくない。

歩く＝ウォーキングといってもゆっくりとした散歩からスピーディーに歩く速歩まであり、多少体に負荷を与えるため手や肩、腰に若干のおもり荷物を持参する場合もある。

体に重量的負荷を与えることによって運動能力を少しでも高めようとする試みである。また、遅歩より速歩の方が体にかかる負荷量が多いことから、歩幅を各個人の従来より3cm程度意識して広げたり、敢えてアップダウンの多いコースを選ぶことでインターバルトレーニング的な効果を求めようとする人々もいる。

ノルディック・ウォーキング＝（ポール・ウォーキングないしストック・ウォーキング、クロスカントリーウォーキングともいう）も同様の有酸素運動として、近年、急速に普及し始めてきたが歴史は浅い。ごく最近の現象である

北欧、とくにフィンランドで1930年代から始まったノルディック・ウォーキングは、元々はクロスカントリースキーチームのオフシーズントレーニングとして採用されていたものである。それがフィンランドやスウェーデンで大衆化したのは1980年代と言われている。全身の筋肉の90%を使って短時間に運動効果をあげることで、現在ではアメリカ合衆国、ドイツ、オーストリアなど欧米諸国に普及し、愛好者700万人を越える、と松谷之義は著書（2007年）のなかで述べている。

勿論、今日では冬期間雪原を舞台とする多くのウインタースポーツアスリートの春から秋にかけてのオフシーズントレーニングとして深く普及しているのである。

一般人では、中高年層（シニア）世代での普及が著しい。背景には、内臓肥満、高血圧、脂質代謝異常、糖尿病などメタボリックシンドローム対策の効果が認められるほか、フィットネス効果があり、ポールを使用することで転倒予防やリハビリ効果があるとされてきた。

体の負担を減らし効果的に歩くために2本のポール（ストック）を使

い運動靴やジョギングシューズで歩行するから下半身だけでなく、上半身も使って運動量の増加を図るのが特徴。歩行に対応して2本の杖(ポール)を使うことで膝や腰に懸かる負担を軽減でき、また歩行の姿勢もよくなる。

普通の歩行では使わない胸から上肢にかけての筋肉も鍛えられ、消費カロリーは普通の歩行より20%~40%増えると言われている。

北海道教育大学小林禎三教授の研究「高齢者におけるノルディック・ウォーキングの身体的効果について」によると、さまざまな測定、実験結果として次のような結論を導いている。

“ノーマル・ウォーキングと比較し、ノルディック・ウォーキングはより全身運動に近づくということ、運動強度の調節が容易であるということ、また、体重がストックに分散され、下肢の障害の危険性が低く押さえられると考えられることから、中高年齢者に有効な健康運動である”

さらに、“ノルディック・ウォーキングは中高年齢者の健康の保持増進に十分な効果が期待できるスポーツ、さらに冬場の「歩くスキー」と組み合わせることなどにより、中高年齢者にとって「生き甲斐」の1つになりうる”と結んでいる。

普通、積雪のある冬季間はクロスカントリースキー、雪のない春から秋は登山や自転車、マラソンやジョギングなどに精を出す人々に、新たなメニューとしてノルディックウォーキングが加わった格好だ。

フィンランドのスキーヤーでスキーマラソン愛好家アリ・カヨは“ストックを使って脈拍を脂肪燃焼レベルの1分間140回まで上げることでカロリー消費量が普通のウォーキングの1時間280カロリーから400カロリーに上がり、運動効果は50%アップする”という。これは1998(平成10)年11月10日付け朝日新聞の記事である。

ともあれ、森林浴を楽しみながらポールを使って楽しく大自然の中を歩くことである。

2、大滝村でノルディック・ウォーキングはじまる

1998(平成10)年11月10日付の朝日新聞は“札幌国際スキーマラソン

参加したことのあるフィンランド人が札幌再訪を機に、最近流行し始めたノルディック・ウォークの人気ぶりや夏用のストックなどを、札幌で旧知のスキー仲間らに紹介した”という記事が掲載された。

2人はフィンランドの航空会社フィンエアーのパイロットでスキー歴40年以上のアリ・カヨ（48歳）と同アシスタントパイロットのユッカ・オヤラ（41歳）2人とも札幌国際スキーマラソン50kmを4回ずつ完走し、またこの2人は第2回大滝国際スキーマラソンにも参加している。

ヘルシンキでは2年前（1996年）から関連の報道も多くなり16万人がメインホビーとして楽しみ、50万人が試しているという。

日本にノルディック・ウォーキングが持ち込まれたのは、この2人が初めてではないかといわれている。

1998（平成10）年12月、札幌で開催された「北海道フィンランド協会」のクリスマスパーティーの景品としてノルディックウォーキングのポールが提供され話題を呼んだ。

このポールはフィンランドのエクセル社製でグラスファイバーとカーボンを混合したものを素材としているが、夏のウォーキング用だから、雪に埋もれない分ポール先リングは小さく、舗装道路でも利用できるように先端にゴム製カバーがつけられている。一見アルペンスキー用ポールに似ているがウォーキングポール専用として開発され製造されたのもで札幌のスポーツ店（札幌スキッド、石井スポーツ、パドルクラブ）などにて販売されている。ポールの長さは身長×0.64が初心者用、慣れてくると0.68をかけるといい。

一説によれば、アルペンスキー用として知られているフィンランドのエクセル社製ポールの販売量はウォーキング用の方がアルペン用より多いといわれている。

旧大滝村教育委員会の藤田隆明はフィンランドで健康づくりスポーツとして手軽で気楽に楽しめるこのスポーツに興味を示し、1999（平成11）年2月、密かにフィンランドからノルディック・ウォーキング用ポールを取り寄せていた。

1999（平成11）年9月24日（金）読売新聞夕刊に、カラー写真2枚つき8段記事が載った。表題は「上陸!! ノルディック・ウォーキング」、「ストックが魔法の杖」、「フィンランドの人気競技」、「大滝、札幌で講習会」の見出しが躍っている。

リードにはつぎのような記事が記載された。

“スキーのストック（ポール）を使いながら草地を歩く、フィンランド生まれの「ノルディック・ウォーキング」。この耳慣れないスポーツが全国に先駆けて胆振支庁大滝村に“上陸”した。北海道体育協会も「北国の健康づくりにぴったり」として、札幌でこのほど、初の講習会を開き、道民への普及に乗り出した。”

記事の書き手は読売新聞社の石田徳幸である。

大滝村にノルディック・ウォーキングを紹介する橋渡し役はフィンランド中部のヴオッカティに住居を構えるトピ・サルパランタだった。

トピはフィンランドのスキー複合ナショナルチームの選手であり、リレハンメルオリンピックも経験して、2007年からは日本の複合選手高橋大斗（ワールドカップ2勝）の専属コーチにもなっている名スキーヤー。

トピ・サルパランタの大滝在住中数度この村を訪れた父親のヴェッサベッカ・サルパランタもまた、フィンランドを代表したスキー複合選手であった。

1998（平成10）年3月、札幌で開催されたワールドカップの直前、大滝村で開かれた合宿練習が縁で、大滝村教育委員会はトピ・サルパランタを村のスポーツインストラクターに指名する。そこでトピは1999（平成11）年1月から2000（平成13）年3月までの冬2シーズン、クロスカントリースキーの体力アップ、技術指導を村民の高齢者や主婦などに行うことになったのである。

トピは、1999年3月、日本での休暇を利用してスノーボードのハーフパイプ練習中転倒して腕を骨折する。退院後の4月以降、彼は旧大滝村小中学校を廻りクロスカントリースキー板の清掃、ワックス塗りなどをして過ごしていた。

その段階までトピはノルディック・ウォーキングについて何も知らず、

フィンランドでの経験もなかったのである。

フィンランド人ですら、ポールを使って野山を歩くスポーツ普及は、ほんの2年から3年前に普及し始め、その後急速に広まったものであり、ノルディックウォーキング情報はむしろ大滝村の藤田隆明の方が早かったほどである。

藤田はもっぱら北海道フィンランド協会の井口光男理事長や井幡篤徳理事らからフィンランドで行われ始めたノルディックウォーキング情報を得ていた。

大滝村の春から秋にかけての雪のない季節、冬のクロスカンリースキーコースを使って、フィンランドでも始まったばかりのポールウォーキングをおこなってもいいのではないかと、トピ・サルパランタに話しかける。藤田は誰でも出来る成人病予防に有効なスポーツであるし、君の母国フィンランドのスポーツではないかと持ちかけたのである。

トピ・サルパランタは、直ぐにフィンランドのポールメーカー、エクセル社に直接電子メールを入れて情報を取得、指導方法については英語版ポーパーヘッドの教材を送付してもらうことになった。

しかし、肝心のノルディック・ウォーキングのポールを日本国内で調達することができない。そんな折り、1999（平成12）年6月、トピの父親ヴェッサベッカ・サルパランタが旧大滝村を訪問することになり、エクセル社もフィンランドの英雄的存在サルパランタ親子に敬意を表してポール12セットを村に寄贈することにしたのである。

贈呈式は6月8日（火）旧大滝村総合運動公園のクロスカンリースキー休憩施設「キートスマヤ」前において「フィンランドの文化を知る会」、「クレヨンサークル」、「歩くスキー愛好者」などの団体が集まるなか、サルパランタ父子から旧大滝村宇佐美教育長に手渡された。

旧大滝村教育委員会は、早速ポールの贈呈式とあわせて村民ノルディック・ウォーキング教室を開催し、技術・体力養成の方法やポール・ウォーキングのもつ意義を村民に伝授したのである。

ノルディック・ウォーキング教室（トピ・サルパランタのノルディック・ウォーキング教室と名付けられた）は6月8日を第1回目とし、11

月末まで週3回、時間は午前10時から11時30分、午後1時30分から3時で、定員は10人、村民は誰でも気楽に参加できる。講師はトピ・サルパランタや藤田隆明がつとめた。トピの指導は全て英語と片言の日本語で行われたが受講者からは大変喜ばれた。

旧大滝村はカナダやフィンランドとの定期交流の結果、村民の英語に対する恐怖はかなり遠のいていた。

野外授業の施設は冬場に利用する常設クロスカントリーコース中心に展開する。

トピ・サルパランタはノルディック・ウォーキング授業のない日は、教室となるコースの草刈りや整備に時間を費やしたのである。

冬のクロスカントリースキーと同様、ノルディック・ウォーキングのコース整備は極めて重要である。コースに起伏があり、草地やウッドチップの敷かれ整備が行き届いたコースをポールを手にクロスカントリースキーに近い感覚で歩くと一層運動効果があがる。

“ただ歩くだけでは飽きてしまう人もポールを使うと動きにリズム感が生まれ、やる気がでてくる”と藤田はいう。

情熱を込めたトピの指導力には人気と定評があり、毎回午後の教室に10人以上集まりうるのは人口の少ない旧大滝村では驚異の出来事であった。

トピにノルディック・ウォーキングの経験があったわけでもないし、フィンランドに在住していた折りトレーニングを受けたこともない。フィンランドから取り寄せた教本と父親などからのコメントを頼りに、独自に創意工夫し、旧大滝村で実践しながら札幌など道内に広げていくことになったのである。フィンランドのオリンピック選手の面目躍如たるものがあつた。

以後毎年道内各地でおこなわれるノルディック・ウォーキング指導者講習会の基本教本はトピ作成によるものが準用されていく。

いままでは冬期間のみの利用に終わっていたクロスカントリースキー常設コースが一部であれ夏場も利用できる効率性と休憩所「キートスマ

ヤ」も年間活用できることは意義深い。

ノルディック・ウォーキングが旧大滝村で始まってからは、札幌市、旭川市など北海道各地に広がり、各地からの問い合わせも増えた。この効用に着目した北海道体育協会は1998（平成11）年9月19日、札幌市真駒内公園で講習会を開催し、道内各地からスポーツ指導員ら150人が参加している。

指導者はフィンランドから大滝村に招聘されたトピ・サルパランタらである。

指導内容を簡単に整理しておく。

まず、ノルディック・ウォーキング用専用ポールを購入しなければならない。ポールを地面に突いた状態で腕がやや鋭角になる長さ、これを両手に持ち30分から2時間、一定のペースで歩く。個人差があるから、距離はそれぞれ個人の体力に応じたものにする。運動中仲間と無理なく会話できるくらいでいい。心拍数は120から150になるのが望ましい。

胸と肩の筋肉が伸び、腕にかけての筋肉がつく、首や肩の廻りの緊張と痛みを取り除くなどの効用がある。ポールはパドルクラブやニッセンスポーツ、札幌スキッドなどスポーツ店にあり、ポールの長さなどは店員が相談に応じてくれるが、値段はワンセット7000円から1万円程度である。

トピは2000（平成13）年3月末、1年4ヶ月、2つのスキーシーズンに跨る旧大滝村でのクロスカントリースキー指導の任務を終え、フィンランドに帰国した。

3月31日は村役場でトピの離任式が行われることになっていたが、折しもその日、有珠山の西山が噴火したニュースを見るなり、フィンランドから迎えにきた父親ヴェッサベッカ・サルパランタ父子は式をキャンセル、有珠山に向かってしまった。

フィンランドには火山がない。従って地震もない。火山灰が降ることもない。有珠山噴火が余程珍しかったに違いない。壮瞥町の久保内辺りでトピ・サルパランタが撮影した有珠山噴火の写真が、フィンランドで

地域社会の活性化とスポーツ文化の振興(クロカンスキー・ノルディックウォーキングの村づくり=旧大滝村を事例に)

報道関係のニュースに使われたことが、あとで旧大滝村役場に伝わってきた。

3. ノルディック・ウォーキング北海道各地に拡大

トピ・サルパランタのノルディック・ウォーキング指導は旧大滝村に留まらず道内各地に及んだことから、講習を受けた地域の人々によってノルディック・ウォーキング協会の設立の動きが加速した。

北海道ノルディック・ウォーキング協会の設立は旧大滝村モデルが北海道レベルに普及したものといつて良い。

2000(平成13)年5月、有酸素運動で健康増進に繋がるノルディック・ウォーキング協会組織が旧大滝村に設立される。発祥地は旧大滝村であるが、敢えて大滝の文字を冠せず「ノルディック・ウォーキング協会」と名付け、事務局は旧大滝村教育委員会とした。

この優れた有酸素運動を北海道に留まらず全国に発信することを願ったの命名であった。

同協会会長には同年大滝中学校長を退職した菊池賢一が選任された。伊達市に住む菊池は直ちに大滝村総合運動公園前にセカンドハウスを新築し、業務の遂行に備えた。

設立趣意書は“腕を使う運動であり、肩・背など広く全身の筋肉を使用するから普通の歩く運動より40%程度効果を高められる、フィンランドでは糖尿病、骨粗しょう、生活習慣病などに予防効果があること、秀峰徳舜瞥山に抱かれ、春は水芭蕉、夏の清流、秋の紅葉のなか森林浴を満喫できるコースがある、など挙げ、生活文化の向上に寄与させたい”と述べられている。

そして2ヶ月後の7月、第一回おおたき国際ノルディック・ウォーキング大会を開催、87人が参加した。8月には「ノルディック・ウォーキング協会ニュース」第1号が発行された。

協会設立にあたっての挨拶(創刊号)のなかで菊池会長は“平均寿命が80歳を超え、社会が急速かつ複雑に変化している現在、心身のストレスを解消し、健康を維持するための工夫が不可欠になっています。この

ような現状を見越して、大滝村では10数年前から村民の冬の健康づくりのために「利雪・親雪」を合い言葉にクロスカントリースキーの普及・発展に取り組んで参りました。その結果、夏季間のトレーニングと健康づくりのために、ノルディック・ウォーキングに取り組む人たちが最近急速に多くなってきています。この機会を捉え、ノルディック・ウォーキングを愛好する人たちが集い、全国に先駆けて「ノルディック・ウォーキング協会を設立しました」と述べている。

協会ニュースのなかには週3回程度おこなわれる夏のノルディック・ウォーキング教室開催日程、コースや集合場所が書かれ会員登録と会費納入の件、および会員名簿も記されている。手作りの9ページだて会報であるが、このスポーツを全国に先駆けて実施していくことに対する情熱と勢いが伝わってくる。

会費は入会金1000円、年会費2000円。

ノルディック・ウォーキング協会設立の2000（平成12）年6月10日、大会には記念事業として第1回ノルディック・ウォーキングイベントが開催された。

この第1回大会結果は7月13日（木）の北海道新聞夕刊に見出し「ストック突いて森林散歩」、「健康増進 広がる輪」、「大滝村 初の催し好評 札幌でも23日開催」記事として三段抜き、写真入で掲載された。

内容は、「長さが身長7割程度の専用ストックを両手に持ち、地面を突きながら歩く。上半身の筋肉を使うため、普通のウォーキングに比べてカロリー消費量が約40%多いのが特徴で、肩こりなどの解消にも効果があるそう。基本はウォーキングと同じで、歩道、林の中など思いのままに歩け、距離も自分の力に応じて自由に設定できる。もともとはクロスカントリースキーの選手が夏のトレーニングとして行っていた。現在クロスカントリースキーの盛んなフィンランドなど北欧でブームを巻き起こしている。夏冬を通じてクロスカントリーの振興を目指す大滝村が昨年、道内で初めて導入。4kmのノルディックウォーキング常設コースを設置するとともに、今春には村内にノルディックウォーキング協会を発足させて普及に乗り出している。」

大会には、姉妹村であるカナダ・レークカウチン村からの親善使節団の訪問中であることから参加者87人中21人が加わり名実ともに国際交流を含めた開催となった。

大滝村で始まったノルディックウォーキングはポールウォーキングとかクロスカントリーウォーキングなどとも呼ばれ道内や全国に普及し始めた。

札幌市でも同月23日、豊平区西岡公園でイベントの「ノルディックウォーキング2000」が開催され、名寄市では「フットパス」との名称でノルディックウォーキングコースの設定を行っている。

旧大滝村では村民が大会に参加するだけでなく、常設コースを使って日常的にノルディックウォーキングを続けている人々が登場している。

北海道新聞7月13日付け夕刊によると2人の経験談が紹介されている。

“6月から始めたという同村の掘田浩美さん(31)は「だいたい毎日専用コースを1、2周しますが、体重が2kg落ちました」と話す。また昨年10月から毎朝、夕に計1万歩目標に続けている同村収入役鈴木正明さん(60)は血糖値が下がりました。歩けるうちは続けていきたい”

大滝村では、ノルディックウォーキングを開始する10年前からクロスカントリースキー大会がおこなわれてきており、常設コースが出来上がっていたこと。常設コースのうち3kmはナイター照明が設置されていたことがノルディックウォーキングのコースづくりに便利であった。概ね冬のスキー常設コースを利用し、夏は草刈りと歩行面にウッドチップを撒く程度でストックを使い普通の運動靴で歩行ができる。また、冬季間スキー用に使われていた休憩用建物「キートスマヤ」もそのまま使うことができたのである。

4、インストラクター養成のため協会会長等3人をフィンランドのヴォカティに派遣

2000(平成13)年6月、ノルディック・ウォーキング協会は指導者資格取得のため菊池賢一会長以下2人をフィンランドに派遣した。2人は

協会事務局員で地域のスポーツ普及に尽力している橋本善洋と元英語教師で英会話の堪能な菊池祐子である。

日程は6月13日から21日まで9日間。場所は中部フィンランドのスポーツ都市ヴォカティである。

ヴォカティは1999（平成11）年1月から1年2ヶ月に渡り、大滝村教育委員会にスポーツインストラクターとして勤務し、クロスカントリースキーやノルディック・ウォーキングの指導に当たっていたトピ・サルパランタのふるさとで、街全体がスポーツ選手養成施設で埋まっている。高級ホテル並の選手合宿所や通年利用できるジャンプ台、夏の間でも本格的クロスカントリースキーができるトンネルスキー場1.2kmが設置されているなどスキー競技のメッカであることは先に述べた。

大滝村でのフィンランドからの派遣指導者トピ・サルパランタの帰国後、スキー・ウォーキングとも本格的指導者を失ったため、協会では大滝村スポーツ振興奨励補助金と大滝建設協会より特別助成を受けて会長を含む3人をフィンランドに派遣したのである。

トピは、日本を離れてからアメリカ合衆国マイアミでノルディック・ウォーキングの普及指導をしていたが、3人がヴォカティを訪れた折りは、フィンランドに帰国しており、彼等は教本に沿ったステップ1から4までの指導方法を段階的に学んだ。

菊池賢一、菊池祐子、橋本善洋の3人は当地でノルディック・ウォーキングの技術指導や講習、実地訓練を経て、日本人として初めてのインストラクター認定書を取得し、帰国したのである。

2002（平成14）年5月、「ノルディック・ウォーキング協会」では他の協会との関連が紛らわしいことから「大滝ノルディック・ウォーキング協会（大滝NW協会）」に名称変更した。遅れて発足した「北海道ノルディック・ウォーキング協会」が影響を及ぼしたと見られる。

続いて同年7月、INWA（国際ノルディック・ウォーキング協会）公認の指導者講習会が開かれた。INWA（INTERNATIONAL NORDIC WALKING ASSOCIATION）は2000（平成12）年12月設立されている。

2006（平成18）年1月、日本で結成された日本ノルディックフィット

地域社会の活性化とスポーツ文化の振興(クロカンスキー・ノルディックウォーキングの村づくり=旧大滝村を事例に)

ネス協会 (JNFA) は国際ノルディックウォーキング協会加盟団体として認証されている。

5. ノルディックウォーキング指導者養成講習会の相次ぐ開催

大滝村からフィンランドに派遣した3人がインストラクター認定書を受領したことでノルディックウォーキング指導者講習会による国内インストラクターの養成が急務になった。

2002 (平成14) 年7月、INWA からリスト・カスリネンを講師として招聘し、第1回公認ノルディックウォーキング指導者養成講習会が大滝村で行われた。参加者は25人であり、胆振管内や札幌方面から駆けつけた人々もいた。第2回は2003 (平成15) 年7月に行い15人が講習会に参加している。

第3回目は2004 (平成16) 年7月からはじめ、受講者は14人、第4回は2005 (平成17) 年7月で29人、第5回は2006 (平成18) 年7月で35人となり指導者数は少しずつ広がりを見せ、第6回は2007 (平成19) 年8月で25人となった。

なお、2007 (平成19) 年は、おおたきノルディックウォーキング協会員1人が「マスターインストラクター」の資格を取得、翌年の07年6月にはINWA 公認ベーシックインストラクター講習会に協会員2人を派遣し、指導者養成に力を入れた。

指導者養成講習会の2年前に始まった「おおたき国際ノルディックウォーキングイベント」の参加者は2000 (平成12) 年の第1回目は87人、2001 (平成13) 年の第2回目、110人、以下2002 (平成14) 年、167人、2003 (平成15) 年147人、2004 (平成16) 年は168人と安定した参加者が確保されていたが、2005 (平成17) 年以降は2～3倍に増加し、300人から400人になった。

第6回イベントの2005 (平成17) 年362人、第7回の'06 (平成18) 年379人、第8回の'07 (平成19) 年は450人に突入した。旧大滝村の総人口が1400人であることを考えれば決して少ない数字ではない。毎年2月の第1日曜日に開かれるおおたき国際スキーマラソン大会がここ10年、

1000人を超えているから、少しずつ追いつく勢いである。

参加者は新伊達市民のほか札幌、室蘭、千歳、苫小牧の近隣市町村に及び、冬のおおたき国際スキーマラソン大会の参加傾向に似てきているし、また、おおたき国際スキーマラソン大会と重なって参加している人々も多い。

大滝村々報（2000年11月号）におおたきノルディックウォーキング協会会長の菊池賢一が協会「創立1年目の活動を振り返って」の短い文章を寄せている。

内容は以下のようなもの。

今年、2000（平成12）年5月、設立総会でノルディックウォーキング協会（全国機関を前提に大滝村の文字はない）が多くの賛同を得て全国に先駆けて正式に発足した。協会設立には、大滝村、村の教育委員会や建設協会、体育協会の助力があったことが記されている。

「活動の経過は協会発足以来、国際ノルディックウォーキングイベント（7月）、清流の集い（8月）紅葉の集い（10月・雨天のため中止）の3回のイベントを計画、実施した。

8月には集中3日間ずつノルディックウォーキング教室を2度にわたり開催し、その後10月末まで毎週火曜日と金曜日に大滝村教育委員会主催のノルディックウォーキング教室を全面的にバックアップしてきた。その結果、降雪を見るまでの間に通算27回の教室を実施し、カナダからの参加者も含め多くの人たちに大滝の美しい自然とすばらしいコースを存分に堪能したのである。その間、新聞やテレビにも何度か大会開催の状況が紹介され、ノルディックウォーキングの知名度も上がり、健康や体力増進への有用度も認識されつつある。事実、このノルディックウォーキングを継続することにより体重を6kg程度減少させた会員や、病気を克服した会員もいて、その有用性と効用は具体化している。また木々に囲まれよく整備されたコースを歩くことにより精神的にも安定すると話す会員も多く、この運動を継続することにより身体的な面だけでなく精神的な面での健康も増進することがわかる。

大滝村のノルディックウォーキング協会の最初の1年を振り返っての活動経過であるが、冬のクロスカントリースキー以上の行事をこなし、効果を挙げているとみている。

今後の取り組み、課題としてはノルディックウォーキングをネイチャースポーツとして確立していくこと、組織的指導者養成、裾野を広げるための取り組み、ポールの確保などを目標に立てている。

そして、夏ノルディックウォーキングで鍛えた健康な心身で冬のクロスカントリースキーに繋ぐ、年間通しての体力養成を考えていることがわかる。

ポールは1セット7000円から1万円と安くない上にカバーのゴムをつけずに野山や歩道を長くあるき続けると磨耗して交換が必要になる場合もあるが、冬のアルペンスキー用、クロスカントリー用ポールに比べ、ノルディックウォーキング専用ポールの方が歩きやすい。

第3回おおたき国際ノルディックウォーキングイベントに先駆け、2000（平成12）年7月26日（金）、27日（土）、28日（日）にフィンランドからマルコ・カンタネバ（31歳）を招いて指導者講習会をおこなった。場所は「湯元ホロホロ荘」と「大滝村ノルディックウォーキング常設コース」だ。受講料は3000円、条件はノルディックウォーキング愛好者で“指導に耐える体力と情熱のある方”とした。

マルコは国際ノルディックウォーキング連盟（INWA）のマスターコーチで、著書には「ノルディックウォークからノルディックスポーツへ」、「ノルディックウォーキングとポールの多様性」、「体育学とは」など多数があり、フィンランドでのTV出演も年100回を超えるスポーツインストラクター。プロコーチとして主に持久力と長距離走の指導に当たっているが、フィンランドの世界的ポール生産メーカー「エクセル社」のポール部門生産ライン部長でもある。

講習会のなかでマルコ・カンタネバが強調している点は、ノルディックウォーキングに入る前の準備運動（ウォーミングアップ）と後のリラックス（クールダウン）運動だ。

準備運動は、ポールを使った肩の運動、リズムカルなプッシュアップ（両足を適当な幅に開いて立ち、両手を肩幅より開いた位置で、肩の高さでポールを握る。ひじを伸ばしながらポールを上へ押し上げ、また肩の高さまで降ろす）運動、上体の柔軟運動、肩の回転運動、ステップ・スクワット（ポールを肩の後ろで持ち、一步大きく前方に踏み出す。その時、後方の足の膝を下方に押す）運動、スライド・スクワット（ポールを肩の高さで、体の前、あるいは肩の後ろで持ち、片方の足に体重をかけながら横にステップする。背筋を伸ばしたままの状態に反対側の足に体重を移動させる）と膝の屈伸を強調する。

また、クールダウンは側面のストレッチ、胸の筋肉、腰の屈伸、伸筋と大腿部前側、背中、ふくらはぎなどのストレッチなどである。

ノルディックウォーキングのテクニックは極めて簡単であるが、健康上の効果を考えると決して疎かに出来ない内容を含んでいる。

ポールは体に近づけて持ち、前方に振りやすいようにグリップは軽く握る。ヒップを使ってつま先を押し出すようにし、前足のかかとと同じ位置の地表を打つようにポールを振り出す。この動きの間、ポールの先は地面にタッチしたまま後方に移動した形になる。

6、「おおたき国際ノルディックウォーキングイベント記念誌」にみるイベントの特徴

第1回目の大会は2000（平成12）年6月に行われた。開催要項には「ノルディックウォーキング協会設立記念」と謳われている。主催はノルディックウォーキング協会、大滝村、大滝村教育委員会で後援は道新スポーツ、大滝村体育協会、大滝国際交流フレンドシップクラブで支援は大滝村救急法赤十字奉仕団、協賛は大滝村建設協会だ。

大滝村のさまざまな組織が関わり、道新スポーツが後援する。これはおおたき国際スキーマラソン大会の構図によく似ている。

開催地および集合場所は大滝村総合運動公園で種目は「ノルディックウォーキング4km、または3km」、参加資格は健康な人で90分以内にゴールできる自信のある人と書かれている。

参加料は無料で参加賞はある。参加対象者は「ノルディックウォーキング愛好者」、歩き方は、このイベントの目標でもある「健康づくりと心身のリフレッシュ、参加者間の交流を深めながら森林浴を満喫する」となっていた。

ポールは持参することになっているが、村民が使用する場合は主催者が用意する。大滝村はノルディックウォーキング用ポールを40セット用意してイベントに備えた。

参加者は訪問中のカナダ、バンクーバー島の中ほどにある大滝村との姉妹村レークカウチン村のメンバー21人、大滝村村民28人のほか、札幌市15人、伊達市、室蘭市、苫小牧市、千歳市などから合わせ87人になった。

大滝村の館林村長、菊池ノルディックウォーキング協会会長などのほか、地元クラブ組織「FIN SKI 50K」の福士久美子や酒井恵真なども含まれているが、冬季おおたき国際スキーマラソンの常設コースで歩くスキーを楽しんだり、スキーマラソン大会に参加している人々が目立った。

2年後7月28日に行われた第3回ノルディックウォーキング大会は種目が初心者対象の3kmコース、秀峰徳瞬瞥山や長流川溪流美を楽しむ森林浴5kmコース、起伏に富んだロングコース7kmに変更され、参加資格「3kmは60分、5kmは90分、7kmは120分で歩ける人」に替わり、参加料当日500円（事前申込者300円）を徴収した。

また、ポールのレンタル制度を設け、1組300円で100組準備したのである。

大会の名誉顧問には1年2ヶ月にわたって大滝村に住み、クロスカントリースキーとノルディックウォーキングの技術指導を行ったフィンランドのトピ・サルパランタ、そしておおたき国際スキーマラソン大会の主催に大きく貢献してきたスチッグ・ヘグブロム、および大滝村ノルディックウォーキング協会カナダ、レークカウチン村支部長が顔を揃え、国際色の豊かなことを感じさせた。

「花のおおたき溪流祭」と同時開催になった2002年の大会プログラムは、表紙にこの年から大会名を変更し「大滝国際ノルディックウォーキ

ング」となり、「カテゴリーはダイエット」、「糖尿病の予防とリハビリ」の活字が躍っている。プログラムにはスチッグ・ヘグブロムらがキートスマヤ前でスタート前の時間をくつろいでいる様子が載っていて、ノルディックウォーキングは森林浴運動、それに北湯沢での温泉浴休養、そして食欲栄養の3浴を健康システムとして捉え、トータルバランスで健康なからだをつくる、とある。

参加者は名簿上100人を超えていたが当日参加者がいるから、実数はさらに増加したと思われる。

参加者の出身先はオランダ4人、フィンランド3人、カナダ1人の外国からが7人、国内では札幌市が29人と多く、大滝村の16人、他は苫小牧市、登別市、室蘭市、伊達市、虻田町、千歳市、岩見沢市などで、やはり雄大な徳隣警山や長流川の清流、ノルディックウォーキング後の温泉入浴を兼ねた人々、しかも冬季のおおたき国際スキーマラソン大会に参加する人々と名前が重なっていることが多い。

第8節 胆振フィットネスパーク構想の提案

1. スポーツで体と心を癒す

フィットネス（健康）パークを構想するとき、前提になるのはスポーツが文化であること、スポーツ文化とは何か、この認識を再確認しておかなければならない。

一般的に我々は歌や音楽、彫刻や舞台芸術、美術は文化と考えるが、スポーツを文化と考えることは少ない。むしろ、これまでの体育は身体の鍛錬と競技での勝敗を先行させ、あるいは競技力の向上や身体を鍛えて強靱な兵士を養成する手段として取り扱われてきた歴史を持っている。従来 of 体育には人生を豊かにする文化的性格が乏しく、体を鍛え、競技会で勝利する、いわば勝負の世界、優勝劣敗の世界を想定したものが大勢を占めていた。義務教育や高等教育にも「体育」ないし「体育実技」の科目が主流を占め、「体育理論」もこうした科目を補完し、助長する性格が強かったのではないかと思われる。

20世紀に入ってからプロスポーツが隆盛を極め、見るスポーツとして

の大衆化が進んだ。そこには自らが行動して参加するスポーツと、見て楽しむスポーツが分断されてしまっていて統一されない現実が現れた。国民共有の文化財であるスポーツがプロ化すると一企業や一個人の利益や嗜好性でスポーツ内容が大きく変化するから、スポーツ文化の性格が乏しくなる。

本来文化はヒトの心を豊かにする。身体機能が強化され、健康が維持されると精神的にも肉体的にも豊かさが戻ってくる。それは、映画・演劇、音楽会を鑑賞したり、レジャーや祭典、美術で心を癒すことと同じで、精神的リラクセーションの内容を含んでいる。

スポーツは身体文化であり、芸術文化と共有性がある。これまで「体育」といわれてきた名称も「スポーツ科学」とか「身体運動健康科学」というイメージに変えて、身体文化をスポーツ文化と同義語に考えては如何のものだろうか。

もうひとつは、アスリート達の競技スポーツは盛んであるが、いわゆる大衆スポーツが観客をも巻き込んで文化の色彩を色濃く出すということが、日本では比較的乏しい。

ボストンマラソンやホノルルマラソンに似たアスリートと一般大衆が同時に走る大会は日本にも多いが、強いアスリートが走り去った後、日本で一般大衆マラソンランナーが登場するころの観客数は激減する。

夏の札幌マラソンや冬の札幌国際スキーマラソンも同じで、トップアスリートが通過する地点やフィニッシュ地点には観客がいるが、一般大衆のやや遅い人たちがゴールするころは施設の撤去が始まり、観客もほとんどいない。

これが、スウェーデンのヴァーサロペット90kmレースで見るとかなり違う。

この大会は5万人程度のスキーヤーが参加することもあるから3日間に分けて行われる年度もある。スタート地点はスカンジナビア山脈中腹のセーレン、フィニッシュ地点は90km東のモウラで制限時間は12時間、朝8時に出発したスキーヤーは夜8時までには到着する義務がある。

時間が遅くなればなるほど、スキーヤーの数も減り、暗闇のなかに敷

かれたトラックを頼りにひたすら走る。あと5km地点からライトアップされているからコースは明るいが観客はばらばら応援している。ゴール近くになると数百人規模の観客がうねりのように応援をする。たまにたった1人か2人が通過する度にはである。遅く到着したひとは、早いアスリートに比べはるかにくたびれてフラフラな状態だ。そういう人たちを応援するために夕食後でもゴール地点の観客席にやってくるのだ。これはお祭りだ。まさに大衆スポーツ文化の極みだと思った。

大衆スポーツのなかで走者と観客の気概が一体化する、こんな光景は日本でなかなか見られない。

商業主義が前面に出ないまでも、最近のスポーツは競技力向上と勝敗にこだわるのが至上命令になっている。スポーツ業界から資金や用具の提供を受け、業界の宣伝活動がついて回るようになると競技者は自己閉塞的になり競争相手に不利になるような行動が目立つ。薬物投与もアンフェアと知りながら勝つための、記録を向上させるための手段として使われる。目的合理化の道だ。彼らは常に緊張感が漂い、ピリピリしていることがよく分かる。

オーストラリアの「カンガルーホペット」とアメリカ合衆国の「アメリカン・ビルクバイネルレネット」というクロスカントリースキーワールドロペット大会に出場したとき、合宿所はトップアスリート数人と一緒であった。翌日のロペット大会では、優勝を争う、国を代表するような選手達だ。

ほんの数台しか置いていないワックス台を独り占めして行き過ぎと見られるほど時間を掛けるから、他の選手は利用できず、真夜中まで待たされる。誰の目にも自己中心的に映ずるのだ。試合前から前哨戦が始まっているが、とてもフェアとはいいがたい。

トップクラスの選手は雇われている企業に気を遣い、運動用具を提供されている企業に心を配り、監督・コーチに気兼ねしながらレースに登場してくる。勝利することを期待され国の威信を背負って競技に出走した選手が敗者になったときの姿も時折見かける。

チェコのある女子選手は期待の成績を残せなかったため雪の降る寒い

戸外で泣き続け、合宿所に入ろうとしない。入ることができないのである。

これがアスリートの世界だ。

他方、一般参加者は極めてリラックスし、どこの国の人々ともスキー技術やレース運び、コース状況、ワックスワークなど話し合い、和気藹々としている。まさにフィットネスと快楽を追求しようとしている感じだ。

無理をせず楽しみながら、仲間との会話を楽しみ、生きる喜びを感じられる行動様式、そこにスポーツ文化の意味があるように思う。

2. 広域圏フィットネスパーク構想の確立に向けて

胆振フィットネスパーク構想を考える場合、旅（移動・ドライブ）と各種スポーツの実践(夏季はノルディックウォーキング、フィッシング、ラフティング、ブッシュウォーキング、スイーミング、ホースライディングなど、冬季はクロスカントリースキー、アルペンスキー、スノーシューハイキング、マウンテンクライミングなど)そして、クールダウンの後には温泉や宿泊休養を行う環境整備を施すことである。

おおたき国際スキーマラソンが集客力を高めたり、常設コースを利用しているクロスカントリースキーヤーが増える原因の1つは環境整備、主にコースづくりの技術水準の高さがあった。

これからも自治体の領域を超えたホーストレイルやクロスカントリースキーコースの設定、ハイキング（登山路）やラフティングコース整備やフィッシングの規則・方式の変更など考えていかなければならない。

1自治体内の地域政策では限界がある。広域的な圏域を設定して住民の健康づくり、国民のスポーツ文化の向上視点からの発想していかなければ出来ることも矮小化されたものになる。

事例としてあげるならば、毎年行われている「湧別スキーマラソン大会」これは合併以前、白滝村・丸瀬布村、遠軽町・上湧別町の4町村に跨って85kmのコースを造っていた。勿論、大会距離として国内最長である。時には川を渡り、道を横切り、線路を越えなければならない。近隣地域の行政と住民の協力なくしてこんな長いコースは取れないし、大会

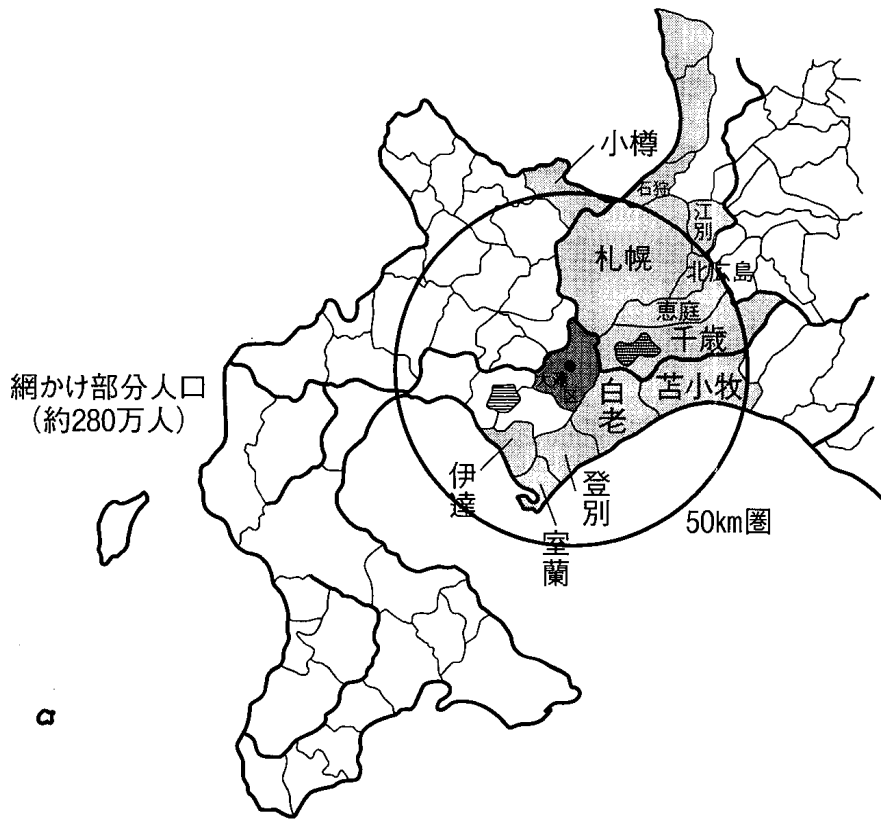


図2 道央人口集中地区と大滝区から50km圏

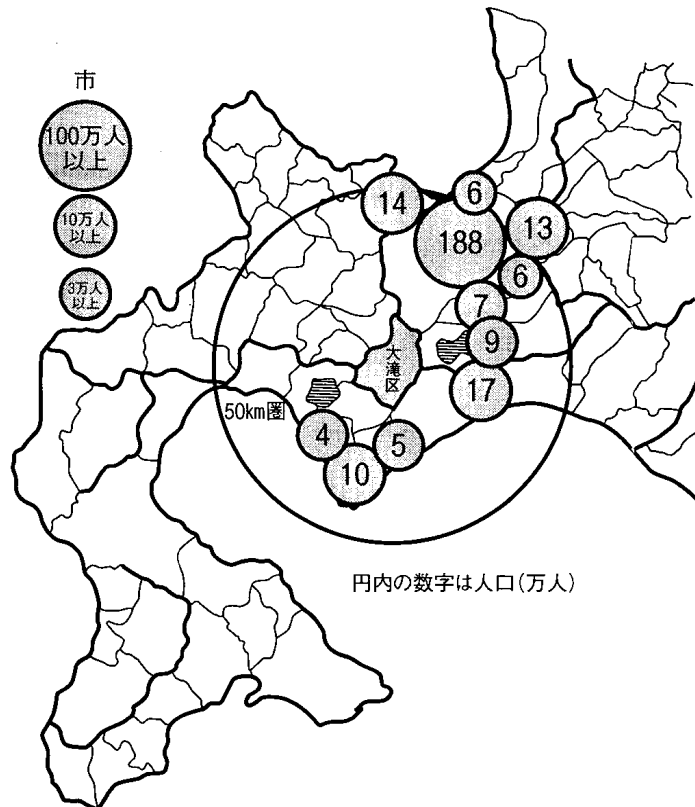


図3 大滝区と11市からなる北海道J型メガロポリス

運営も出来ない。

日本最大の馬産地として知られている日高地方に自治体の枠組みを超えたホーストレイルの構想が進んでいると聞く。門別町、新冠町、新ひだか町、浦河町に繋がる乗馬用散策路である。

オホーツク100kmマラソンやツールドホッカイドウ（自転車競技）も自治体を超えた広域圏を対象にしている。

これからは、1自治体の中でイベントや日常的なレクリエーションエリアを構想するのではなく、一定な考え方や基本原則の基づいて広域的な視野で発想していくことが重要ではないか。

3. 北海道J型メガロポリスの人口資源と経済力を取り込む

大滝区（伊達市）を中軸と考えた圏域の特徴を押さえて何が考えられるか、胆振圏が置かれている地理的特徴を生かしたフィットネスパーク構想とはどんなものか。

地域の機能性、結節性を考えるときに、しばしば中心と周縁（周辺、辺境）の関係が語られる。

親分である中心都市域はいつも子分である周縁農山村や地方都市を従え、周縁から価値を収奪する状況を指している。こうした事柄は、例えば先進国（中心）と中進国ないし途上（後進）国の関係に用いられることも多い。日本国内で言えば太平洋ベルト工業地帯（中心）が東北・北海道、北陸、山陰、南四国、九州、沖縄を従え、地方の価値の一方的に収奪する。その中心に座すのは東京（首都圏）だ。地方はこうした中心に価値を吸い取られ、地域格差が一層進行するのである。

北海道で言えば、札幌圏（中心）ないし北海道J型メガロポリス（中心）が他の道内全域（周縁）に支店、支社網を張り巡らし、人流、物流、金流、情報流の仲介性を得て価値を中心に集中させる構造を持っている。

メガロポリスは都市が連結し、帯状のような状態になっていることをいい、日本では東海道メガロポリスがよく知られている。

J型は頭に小樽市、札幌市、石狩市、江別市を置き、胴体部分は北から北広島市、恵庭市、千歳市、苫小牧市、登別市、室蘭市、伊達市の都

市群がJ型に並ぶメガロポリス(帯状都市群ないし連結都市群)である。市域以外ではこの領域に白老町が加わるだけだ。

この北海道「J型」メガロポリスも近年の市町村合併で、むしろ右向きの「兜型」に映じるようになった。だから、北海道兜型メガロポリスといってもいい。

この11都市群の面積は北海道の6%強なのに総人口は280万人で北海道人口の2分の1が集中する、地方広域都市群であり、政治、経済、社会、文化の中核的機能を維持している。通称札幌圏(中心)は北海道全域のなかで常に求心的であり、地方(周縁)は逆に遠心的作用を役割として担ってきた。

通勤、通学の30km圏は日常的な人口の還流圏になる。例えば、札幌を例にとると、日常的通勤、通学圏は千歳市、小樽市、岩見沢市などであり、東京、大阪の通勤・通学圏よりやや狭い。ヒトの日常的な移動(通勤・通学の往復)は、モノの移動、カネの移動を伴い、情報も同様な還流構造のような流れ方をする。この還流構造の中心は行為の領域を示し、文化的地理的な機能地域、結節地域を形作っている。

一般的にはこうした考え方は理解しやすい。しかし、スポーツ文化の機構や構造を想定した場合、中心と周縁の入れ替え、発想を転換するとどうということになるのか。

世界地図は常に北半球が上部に、南半球は下部に描かれている。我々はこれを普通で常識的な地球の描き方と心得ているのだ。しかし、オーストラリアやニュージーランドの地図には逆の描き方がある。おまけに「No Longer Down Under」と書かれている。逆転の発想である。地球という惑星が宇宙に漂っている様に北も南もない。

J型メガロポリスのJの字は、実際問題都市配列からみれば弧(半月)の形をしている。

中心部に伊達市大滝区(旧大滝村)を据えると半径60kmにJ型メガロポリス11都市は全部が包含されることになる。一部は市域全域とは行かないまでもフォローできる領域である。

つまり、北海道J型メガロポリスは大滝区を真ん中にほゞ半円弧状に

配列している。そして11市に白老町を加えても面積は僅か5000平方キロメートル、北海道全体の16分の1（約6%）の土地に50%の人口が集中しているのだ。

この大きな人口資源をメガロポリスの中心軸にある大滝区が使わない手はない。過疎地域にしては勿体ないほど有難い条件賦与である。

大滝区を含め60km円内の西部地区は虻田、豊浦、ニセコ、蘭越、倶知安、京極、仁木、喜茂別の各町のほか、赤井川、留寿都、真狩の村も存在する。西側半弧は人口の希薄な農村地帯や山岳地帯になっているがこちらは自然の宝庫であり豊かな農村地帯が展開する地域だ。

我々は、これまで農村景観を観光の要素、癒しの要に置いてこなかった。しかし、全国的にも珍しく富良野盆地はラベンダーを切り札に、曲がりくねった溶結凝灰岩大地に展開する穀類、根菜類、花卉類、そして防風林までを観光要素にしてしまい、これと十勝岳連峰を組み合わせ日本一写真を撮影する人々で埋まる場所にしてしまったのである。

根底にあったものは複雑な土地利用景観である。農家の土地所有規模が小さく毎年どんな作物を植えるかで輪作体系が出来上がり、複雑な土地利用をせざるを得なかったことが、結果として幸いした。

大滝区を軸に据えての60km圏は通勤、通学はやや難しい距離にあるが、週末の買い物、非日常的な余暇行動、競技スポーツやリクリエーションのためのヒトの移動には十分過ぎる距離である。むしろ車交通を利用すれば、日帰り行動圏として、また、1～2日宿泊観光・保養圏として面白い位置にある。

東側半弧（札幌圏から苫小牧圏を經由、室蘭・伊達）のエリアに人口の稠密地帯があり、購買力層が厚く分布している。

この過密な購買力層を引き込む要素（プル要因）は美しい山岳地帯（羊蹄山やニセコ連峰、オロフレ山や徳舜瞥山）、と活火山（有珠山、樽前山、恵庭岳、昭和山など）、神秘的な湖沼（支笏湖、洞爺湖、クッタラ湖、オコタンペ湖、ニセコの長沼、神仙沼、大沼など）、休養とリラクゼーションのための温泉（洞爺湖、支笏湖、北湯沢、登別、蟠溪など）、文化遺産的な施設（伊達市の開拓記念館、白老のポロトコタン、洞爺湖町

の火山科学館など)がある。

それ以上に羊蹄山麓の馬鈴薯地帯(芋の花は6月が満開)、ビートやアスパラガスなどの野菜、根菜類、麦類もある。

徳舜瞥山麓の農面道路から眺める長流川溪谷、洞爺湖、有珠山などの景観もあなどれない。

イベントも各自治体1つくらいはなにか行っている。伊達市の「伊達武者まつり」、室蘭市や苫小牧市の「港まつり」、登別市の「地獄まつり」、千歳市の「氷とうまつり」や「インデアン水車まつり」、江庭市の「夏祭り」、北広島市の「ふるさと祭り」や石狩市の「さけまつり」などあるが、非日常的なものであるからその場限りの感が強い。

夏の「洞爺湖一周マラソン」や「千歳青葉公園マラソン」、冬のスキーマラソンは伊達市大滝区の「おおたき国際スキーマラソン大会」や千歳市の「千歳ホルメンコーレン大会」、「恵庭スキーマラソン」がよく知られているが日常的にコースを利用し、シーズン通して滑られるのはおおたきスキーマラソンコース程度でしかない。

スポーツ文化の発信は何も、経済的、政治的勢力圏の中心から周縁に発信される必要はない。

周縁に中心を置き換えて発信することはいくらでも可能である。

事実、おおたき国際スキーマラソン大会の参加者は、このJ型メガロポリス地域からの集客数が全体の80%を占めているのである。

スポーツ文化のひとつの側面で見れば周縁が中心になることに何ら問題はない。

次はスポーツの種類やシーズンによるスポーツ異種業種の組み合わせ、そしてスポーツ文化とジョイントするさまざまな産業や教育、地域的な自然、歴史、多種類の文化との接合の仕方である。

イベントと地域の産業をジョイント化することも重要だ。スキーマラソンの後は温泉でリラックスする。温泉の後は郷土料理が待っている。帰りは地域の特産物を土産に購入する。

ジョイント化は池田町の「十勝ワイン」が知られている。ワインとス

テーキは池田町ぶどう酒研究所レストランの人気メニュー。街の「生きがい課」では老人の陶芸としてワインピッチャーやボトルを製作させる。十勝ワインのイメージを高めるために役場にワインボトルタワー、駅前の噴水は赤ワインと白ワイングラスを模す、タクシーはワイン交通、街の歩道はワインカラーといった具合にジョイント化していく。

伊達市大滝区を中心に半径約30km圏には支笏湖や洞爺湖、クッタラ湖があり、オロフレ山、徳舜瞥山、羊蹄山が聳える。北湯沢温泉、登別温泉、支笏湖温泉、洞爺湖温泉がある。そして何より美しい森林が、溪流が、活火山がある。広大な畑作地帯の春から夏にかけての景観、冬の天気の変化に伴い様々な顔を有する雪原がある。

これまでは支笏洞爺国立公園として本州方面や外国からの観光客中心の入り込み客を狙った商業活動が中心に据えられていた。支笏洞爺国立公園内やその周辺の人々にとっては近くて遠い存在であったのだ。

観光客に楽しんで戴くのもいい。遠くからの湯治客にサービスを提供するのもいい。それ以上に地元住民が、この美しい自然環境や、人文現象を取り込んで楽しむことが重要である。

長寿社会が進行するなか、単に長生きするだけでは意味がない。健康で長生きし、長寿人生を楽しく伸び伸びと暮らしていかなければならない。

無理のない、自分の体力に応じた運動量、家族や友人、カップルで楽しめるスポーツ、そして終了後のクーリングダウン、リラクセーションには温泉で体を休める。年齢にも関係ない、体力の強弱にもさして気を使う必要がない。これが、クロスカントリースキーであり、ノルディックウォーキングなのだ。

シニア世代をフィットネスパークの中核に据え、若年層にも受け入れられる施設やイベントの創造は、北欧などフィットネス先進地域に学ぶことがいい。

おおたき国際スキーマラソン大会の開催や常設コースの利用、ノルディックウォーキングの実践などはフィットネス大国フィンランドから

導入したのもである。

こうした国々からは物質的ノウハウを学んだだけではない。スポーツの持つ文化性の高さ、推進する側の情熱、下向きに目的を達成する精神力など心に響く強い衝撃力が内在していた。学ぶなら物心両面で塊しいをこめて学ばなければ吸収するものも少ない。

4. 胆振フィットネスパークとリクリエショナル・エリア

過密な都会に住む人々にとって週末や休日は気分転換と英気を育む絶好の機会である。

日常生活の舞台をやや離れて他郷をぶらつく、何事にも左右されず山野を歩き回る、ぼんやり温泉を楽しむ、乗馬や海、川での釣りをおこなう、ヨットやカヌーに繰り出すことで有給労働で使い果たした疲労や過労を取り除く必要がある。

冬はスノーシューウォーキング、歩くスキー、山スキー、ハイキングなどフィットネスの性格が加わるものが多い。ある程度身体に負荷をかける運動の方がお勧めだ。これを、リクリエショナル・スポーツと呼ぶ人もいる。(山本久乃、スポーツ文化論)

だが、何処でも歩けるわけではない。何処でも船を繋げるわけではない。何処のでもテントを張るわけには行かない。何処でも乗馬して旅することも難しい。

ブッシュウォーキングもいいが獣道程度でいいからトレイルがいる。ヨットやモーターボートを格安に係留できるハーバーも必要だ。キャンプ場はかなりの自治体や個人経営・会社経営のものが出来ているが、水洗トイレや温水シャワーの設備は余り整っていない。

キャンピングカーの普及が遅れているせいもあって、キャンプ場がシェアされて貸し出される状況もないので、ゆったり感がない。

山小屋でもヨーロッパ人が登山施設の基本をつくった地域では、部屋がシェアされ、トイレは水洗化しているのが一般的だが、北海道ではそうした施設が特に少ない。

アラスカのマッキンレー山では人糞はあるところまで持ち帰り、そこ

で処分するような制度が導入されているが、これも1つのアイデアである。

ヨーロッパやアメリカ合衆国で進んでいるホーストレイルは北海道でも数少ないし、乗馬用馬の育成や預託などまだまだである。

冬から春先にかけて中山峠から喜茂別岳、中岳を經由して無意根山に通じるクロスカントリーコースがある。林間コースには木の枝に赤いリボンが付けてあり、スキーヤーの目印になっている。漁岳も同様だ。さしてお金をかけなくてもフィットネスパークの条件は整えられる。

21世紀は環境と資源の有限性を強く意識しなければならない時代になった。これまでは経済的豊かさとその源泉である物質的有利性の追求が強く意識されてきた。開発、改造中心が過疎・過密現象を作り出し、国土の有効利用の面から見ても、地域経済政策の視点からいっても、アンバランスで人間の側にストレスが貯まる状況を生み出してきた。都市化やリゾート開発による自然破壊、経済優位性を物差しにしたため優勝劣敗の法則が貫徹され、富めるひととそうでない人々の格差が拡大した。独自性や個性の輝く自然界が画一的に遊ばせてもらう世界に変身させられたのである。

ゆとりと癒し、美しさと人間性回復、自然保護の時代を取り戻さなければならぬ。

人間社会にどんな至福とリラックスを提供するかの視点を定めて、フィットネスパークの建設に取り掛かりたい。

(この文章作成には札幌学院大酒井恵真教授、伊達市藤田隆明職員の全面的な協力を仰いだ)

参考文献

- 稲垣正浩『スポーツ文化の〈現在〉を探る』叢文社 2002年4月
 同『スポーツ文化の脱構築』叢文社 2001年7月
 山口泰雄『地域を変えた総合型スポーツクラブ』大修館 2006年6月
 山本久乃武『スポーツ文化論』文化書房博文社 1996年5月
 玉木正之『スポーツとは何か』講談社現代新書 1999年8月
 佐竹弘靖『スポーツ文化論』文化書房博文社 2003年2月
 菊 幸一・清水 諭・仲澤 真・松村和則『現代スポーツのパースペクティブ』大修館書店 2006年6月
 西山哲郎『近代スポーツ文化とは何か』世界思想社 2006年5月
 J・ゴットマン著 木内真蔵・石水照雄訳『メガロポリス』鹿島出版会 1967年12月
 北海道新聞社『北海道市町村データブック』2007年9月
 大滝村『大滝村史』1985年8月、『大滝村史・続刊』2007年9月
 藤田隆明(大滝村教育委員会)「ワールドロベットから歩くスキーを学ぶ」(北海道『北の生活文化振興事業報告書(歩くスキー指導者養成海外研修事業)』) 1991年
 山下克彦(北海道教育大学)・進藤賢一(札幌大学)他「社会教育のための国際交流と住民参加」(NIRA Report『地域社会と教育』社団法人北方圏センター) 1995年5月
 藤田隆明(大滝村教育委員会)「フィンランド冬季スポーツ振興事業」(視察研修報告書) 1996年4月
 藤田隆明「フィンランドと大滝国際スキーマラソン大会」(北海道フィンランド協会会誌『Aurora』) 第9号・創立20周年記念号) 1997年12月
 オフィスミブラ「小さな村から発信する北海道のでっかい大会・おおたき国際スキーマラソン大会」(『ノルディックスキーマガジン・NORU・NORU!』) 1998年3月
 宮口侗廸「先進福祉地域の建設—北海道大滝村—(『地域を活かす—過疎から多自然居住へ』大明堂、1992年11月、濱口・嵯峨座編『大衆長寿時代の老い方』ミネルバ書房 初出) 1998年10月
 Topi Saruparanta『Topi's Ski School』(自費出版) 2000年
 藤田隆明「元フィンランドオリンピック選手・Topi Saruparanta 北海道大滝村奮闘記」(北海道フィンランド協会会誌『Aurora』11号) 2000年6月
 大滝村総務課編『大滝叙情・大滝村閉村記念誌』大滝村 2006年2月
 大滝村広報誌『おおたき』
 おおたき国際スキーマラソン「大会プログラム」1991年(第1回)～2007年(第18回)
 進藤賢一、藤田隆明、酒井恵真『おおたきスキーマラソン誕生物語』FIN

地域社会の活性化とスポーツ文化の振興(クロカンスキー・ノルディックウォーキングの村づくり=旧大滝村を事例に)

SKI 50K 発行 2008年2月